
粉雪

こつぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

粉雪

【Nコード】

N3704B

【作者名】

こつぶ

【あらすじ】

窓の外には粉雪が降りかう、そんな寒かった12月のある日。誰もいなくなった教室で、彼は僕たちに告白した。それは、決別の言葉。光彦視点です。

プロローグ

あの日、追いかけた背中では、どこまでも遠く、追いつくことになった。

それはそれは大きな背中では。

手に届くことのなかった存在。

そして、降り始めた雪のように跡形も残ることもなく消える、そんな存在。

僕らにキヲクだけを残して。

大切なキヲクだけを残して。

そんな粉雪のような存在が、彼だった。

手の中の雪を握り締めることもできず。
彼は消えていった。

ねえ、コナンくん。
あなたは、今、どこで何をしていますか。

プロローグ（後書き）

光彦視点です。

前に『またあした・・・』で中学生コ哀を書いたことがありましたが。それとちよつと描写が重なっていたら、すみません。重なってるかな。

でも、違うようにしますので。

そして、これは光彦視点なので、光彦たち少年探偵団友情や、愛情、新ちゃんへの気持ちなど込められたらよいな、と思います。よろしくお願いします。

また、雪だ。

僕は塾の個室で、一人窓の外を見つめていて、そう思った。

その粉雪は絶え間なく降りしきる。しかしあんなに降ってはいっても、コンクリートを濡らすだけで、白に染めることはない。そんな状態を、僕はただじっと見つめていた。

ここの塾の中にも、授業についていろんなシステムがあるが、僕の受けているシステムは少人数制型で、1人ないし、2人对1人の講師という割合。だから集中して授業を受けられる。中学受験を考える僕はこのシステムを知って、またその講師の経歴から進んで自分で入塾したのであるし、成績も大人数で受けていたときよりも成績がめまぐるしく上がっているのを自分でも感じていた。

今日の授業は、生徒は一人だ。僕と、この授業の担任。たったの二人きりの授業。

そして、こんな粉雪の降る日はとても憂鬱になる。

なぜなら。

「よっ、光彦。宿題やってきたか？」

その声に、はっとして僕は振り返る。

そこには、黒のきっちりしたスーツを着た、担当の講師が立って笑っていた。

4年前に消えた彼にそっくりな。

彼をそのまま大人にしたような、そんな青年。

・・・彼の名は。

工藤新一。

僕は、そんな彼の表情を見つめ、先ほどの粉雪の残影が目に残り、一瞬言葉を失った。

小学校の教室で。泣き叫ぶ歩美ちゃんに、必死で両腕を掴まれ、『行かないで』と言われ。

切なそうに、彼女の頭をそっと抱くその彼の後ろで、粉雪は降ってきて。

窓には、二人の影がぼんやり映っていた。

あの時の様子が、刹那に浮かんで。
胸がきゅう、と締め付けられるような痛みを感じ、思わず無理に
笑みを浮かべた。

☆☆☆

「よし、今日はここまでにしよう。宿題、わかんないところがあれば、氣い使わねーで、ちゃんと電話してこいよ。会える時間は限られてるけど、電話ならいつでも出られるから」

大学と、探偵の仕事と、塾講師のアルバイト。

大学より、アルバイトより、何より探偵業（とはいっても、私立探偵をしているわけではなく、『高校生探偵』だったときのように、警察に呼ばれて事件をとく。云わばボランティアなわけなのだけども）が一番忙しい彼。けれど、高校生だったときのようなあからさまな出演はせず、マスコミ関係には一切取材を断り、大学生活を過ごす。恋人に、講師に。・・・本当は一番忙しい仕事であるはずなのに。

マスコミに出なくなって久しくたつと、世間の人は、彼の名前を、彼の顔を一切忘れてしまう。

一番忙しくて、一番事件に貢献しているであろう彼。

まるで、小学1年の春に現れて、2年の冬に去っていった――僕たちのヒーローだった彼のように。

お金には困っていないはずなのに。どうしてこんなアルバイトなんてしているのだろう、ふと思う時がある。

いくら学生だとはいえ、あの推理力と、いまだ衰えを知らない、世界屈指の推理小説家『工藤優作』が支える金銭面。それだけあれば開業してもおかしくないのに。

ボランティアの時間を減らせばどこだっていける。どこだって稼げる。なのに、どうしてそんなアルバイトなんてするんだろう。なんで……。

「ほら。……雪が本降りにならねーうちに帰れよ。何なら車で俺送ってやつから、ちよつとまっ」

「いいです！」

僕はそう遮るとバックを机からひったくるように取ると、彼の顔を見ずに教室を飛び出した。

「おい、光彦っ」

彼の言葉を後ろで聞き、僕は階段を駆け下りる。

見たくないのに。

正面の大きな窓はどうしても視界に飛び込み、僕はそれを見て、思わず躊躇し、立ち止まった。

紺の空と白い粉雪。

そして、その窓ガラスに反射してぼんやり映るのは。

――泣き出しそうな僕の顔。

あのときのように。あの教室で、彼女たちの前で絶対泣かないと、歯を食いしばっていたときのように。

僕の顔はくしゃくしゃだった。

コンビニエンスストアの前。僕はそこまで全速力で走ると、息を切らせてそこで立ち止まる。はあはあ、と肩で息をしながら、飲みかけの烏龍茶が入ったペットボトルの蓋を開け、それを口に流し込んだ。

とくとくと音を立て口の中に流し込めば、すうっと水分が体内に入っていくとともに、ようやく呼吸が整っていく。

「・・・先生、ホントに戸惑ってましたね・・・」

まだ完全に整い切れていない呼吸を肌で感じながら、僕は先ほど教室を去る間際に、自分と呼んだ彼のその声を思い出して、苦笑いを浮かべた。

この時期、とくにこんな粉雪が降るこの時間帯になると、急に情緒不安になる自分がいる。

あのころのトラウマがまだ自分の胸に残る。

先生には悪いことをした。

彼は全然悪くない。悪いのは自分。

彼の厚意を断って、さよならもろくに言わずに、顔も見ずにあの教室を飛び出した。

いつもならこんなことしないのに。彼の言葉を聴いていても、顔を見ている。それでもひとつの思いを抱えながら、笑顔を作れるのに。

・・・今日はできなかった。

彼が、4年前に外国に転校していった人物に似てるから、『江戸川コナン』に似てるから。

そして、今夜はこんな粉雪が降っているから。あの日のことがどう

しても浮かんできて。どうしても重ねてしまつて。・・・顔を見られないくらい苦しくて。

「ごめんなさい、先生。宿題がんばりますから・・・」
情緒不安定なこの僕をお許しください。

僕はそう呟いて、再び歩きだした。

塾に置き忘れてしまった青のビニール傘。これくらいの雪じゃ、傘を買うのはもったいない、と、ちらりコンビ内のビニール傘を一瞥して、僕は店に入らず、前へ進んだ。

歩きながら、遠くで信号が青に変わるその光景をぼんやり見つめたままで考える。

4年前、^{あのころ}小学2年生だった僕たちも今ではずいぶん背が伸びた。

元太くんなんて中学にも入らないうちから声変わりが始まつたよ
うで、まだ初期段階のそのガラガラの声を自慢に、先月は学校を代表とする『応援団』なんていうのに立候補して。

歩美ちゃんは2年前に吹奏楽部に入部したときからフルートを習い始めて。今じゃ吹奏楽部の部長を務め、今年の夏には音楽祭で金賞を受賞した。

灰原さんはあの年齢^{とし}で警察関係のコネクションなのか、どこかの製薬会社での研究を任されていると風のうわさで聞くし。普通に学校に登校しているから、それが本当かどうかは知らないけれど、少なくとも笑顔が多くなり、あのころよりまっすぐ歩いていることは確実だ。

でも僕だって・・・僕だって前へ進んでいる。

だってこんなにかんばってきたじゃないか。

小学4年生で、部活にも入らず塾に入り始め、彼みたいになろうと努力した。

今まで以上に勉強もし、サッカーや空手なんて習つて。

彼と並んでもおかしくないように。・・・そして、彼を追い越せるように。

灰原さんや歩美ちゃんの笑顔が見られるように。「すごいね、かっこいいね」と心の底から言ってもらえるように。

・・・なんて。

・・・ほら。

こうやって、僕はいつでも彼の残影を追いかけているんだ。自分だけ足踏みしていて。彼から逃げられずにいる。

僕が彼女たちに恋心を持ったばかりに。

彼女たちが彼を僕以上に認めていたばかりに。

勝負をする前に、戦いを挑む前に、両親の仕事の都合を理由として、離れていったばかりに。

そして、彼というのが好きで、尊敬していて、離れたくなかったばかりに。

僕はこうして――。

ああ。いつになったらこの呪縛は解けるのだろう。彼を心から笑って語れることができるのだろう。

それはきっと彼とまた話せるとき。そんな気がする。

でも、それは永遠に叶わない。なぜなら。

なぜなら僕は知っていたから。
彼にはもう二度と、会えないことを。

あの日、粉雪の中で。

「また会えるよね。また一緒に少年探偵団できるよね！」
そう泣きながら聞いた歩美ちゃんに対して、彼はフォローの言葉もいれず、ただ悲しげに笑うその表情を見て、僕は悟ってしまったのだ。彼ともう二度とおんなじ時間を共有できないことを。少年探偵団を再結成する以前に。

彼と同じ授業を受け、笑い、ケンカをし、そんな当たり前のことができないということ。

だけどそれは僕だけじゃなくて、きっと周りも気づいていたんだ。だけど、誰も口に出すことができなかった。

・・・僕は今でもそう思っている。

2（後書き）

どうして私が書くとき最近暗い話ばかりなんだろう（笑）。そして似たような話ばかり（！）ぎゃっ。

とはいえ、また違う話なのでこれから話を広げられるよう、がんばります。

粉雪は僕の頭を濡らし、そして、首筋、手や服に落ちていく。

こんな寒空の中、地上に降りてきた雪は、ひんやりとそこだけ体温を下げて、そして僕の体温でじわっ、とすぐに溶けた。

溶けていく様を眺めることもないまま、僕は歩き続ける。

家に帰るために。

こんな日は、さっさと家に帰り、母の作った温かいご飯を食べて、湯に入って体を芯から暖まらせてしまった方がいい。そしてテレビも見ず部屋に籠ってカーテンを締め、イヤホンを装着し、クラシック音楽を大音量にして聞きながら、さっさと寝てしまった方がいい。目覚めたらきつと雪は止んでいるから。朝になって、また別の景色に出会うから。

だから……。

「あゝっ！ いたっ！」

急に聞こえたその場に響く素っ頓狂な大声に、僕ははっとして足を止めた。

その声は、多分。

振り返れば案の定そこには、幼稚園からの幼馴染、歩美ちゃんが立っていた。

僕を見つめる視線はとてもふんわり柔らかかった。

「……新一お兄さんから電話もらって……。……。なんだ、よかった。すぐに逢えた……。どっか家出でもしちゃったらどうしようかって思ってた」

心底安心したのか、大きな息を吐くようにその言葉を言った。笑顔は崩れぬまま。

「家出なんてしませんよ……。別に原因は家じゃありませんし」

だからといって、彼のせいでもない。そして、ずっと前に僕らのもとから旅立っていった彼のせいでも。

その言葉に、歩美ちゃんは深く言及しなかった。ただ、「そっか」と小さく言って、そっと視線を下に落としただけで。

「哀ちゃんにも、元太くんにも電話したって言ってたから。新一お兄さんだけじゃなくて、二人にも教えてあげなくちゃね。・・・とりあえず温かいところでご飯、食べよう？」

「・・・はい」

もうすぐ夜も7時になり、お腹がすいていた。普段なら、まだまだ眠る時間ではないにしろ、こんな時間に子供だけでご飯だなんて、といくら歩美ちゃんの誘いでも断っていた僕だったが、でも彼女の心遣いに感謝して。・・・何より、僕自身が、彼らと一緒にいたい。そんな気持ちになっていた。

☆☆☆

ファミリールレストランに入店すると、10分もしないうちに元太くんと灰原さんがやってきてくれた。僕の隣に元太くん。そして僕の目の前に歩美ちゃん。そしてその隣に灰原さん。

子供だけで、こんな夕食時に固まって外出だなんて。小学6年生になったけれども、きっとまだ傍から見ると奇異であることは間違いない。けれど、今の僕には、頭の片隅にそのような考えがあるだけで、早く家に帰りたいだなんて思うことはなかった。

「・・・ホント、人騒がせなヤツだぜ、まったく」

メニューを注文した後、ウェイトレスが去ったその後で、暫しの沈黙のあと、口火を切ったのは元太くんだった。呆れたように僕を一瞥する。

いつもなら僕が彼に言うセリフであるのに、今日はその反対だ。「まあ、あの人もあの人だけど・・・」

ため息交じりに言葉を濁し、ちらりと僕に向ける灰原さんの視線。それが一番痛い。

「ちよっ、元太くん、哀ちゃん。そんなこと言わないでよー。光彦くんがかわいそうだよー」

慌ててフォローしてくれる歩美ちゃんが唯一の救い。彼女だけを好きになっていたら、どれだけ心が楽だろう。だけど、それでも僕は目の前の茶色の髪の彼女も好きで。この二人への感情全てが、本当の『恋愛感情』かはわからないけれど。

「それで？ いったいどういうわけで、こういうことになったわけ？ 工藤くん、ホント心配してたわよ。気づかないうちに何か気に障ることだったんじゃないか、って」

10も違う彼に対して、『工藤くん』と呼ぶ灰原さんに対して、昔は違和感というか変な詮索をしたものだが、今はもう慣れた。僕はそんな彼女たちの視線に思わず項垂れてしまう。

「受験も近いし、追い詰められてたりしてなきゃいいけど、って。結構そーいう弱いところあるから、変なこと考えなきゃいいけど、って。・・・彼、あなたたちに対して心配しすぎなのよ。あんなに一緒にいたのに、全然あなたたちのことわかってないんだから」

過保護なのよね。

灰原さんの言葉が耳につく。

どうしたんだろう、今日の彼女は少しいつもと違って。刺々（とげとげ）しい言い方に僕は 自分の胸の痛みも忘れて、彼女の気持ちを読み取ろうと必死になっていた。

「・・・違うよ、哀ちゃん。過保護じゃない。・・・『優しい』んだよ。・・・コナンくんみたいに」

そのとき、目の前の歩美ちゃんがポツリ、とその言葉を呟いた。

一瞬、合わせたように3人の視線が彼女の方に集まった。

コナン。

それは、僕たちの会話の中にこの4年間、数え切れないほどに出た名前。

彼への言葉は何度も聴いたし、何度も口にした。

春でも、夏でも、秋でも、彼を賞賛し、時には軽口を立てたりして、彼らと笑いあい、そしてそうやって励ましあった。

けれど、僕にとって。

『今の』僕にとって、その名前は聞きたくなかった。

自然と窓の外を向く。まるで何者かに向かされたかのように、向かなくてはいけなかったかのように。

僕は窓に視線を向けていた。

外は、まだ、粉雪が舞い散っていた。

3 (後書き)

どうしても、少年探偵団ははずせないようです (笑)

さてさて、次回はどうなっていくんでしょう。これはプロローグ的な話にしていくつもりなので (うまくいけば) 話は中学生あたりにもっていききたいので、そこまで深く話さないつもりでいます。

これからもよろしくお願いします。

いつこの粉雪は止むのだろう。

いつ、この雪は積もるのだろう。

いつ、この夢から覚めるのだろう。

――そして、いつ、僕は救われるのだろう。

『コナンくんみたいに』。

そのとき、僕らの前でたった一言、歩美ちゃんがそう言っただけで、僕はこの胸がはちきれそうになるのを感じていた。

誰かに仕向けられたように道路沿いの窓の外に自然と目を移せば、あの日のような粉雪は舞い散るだけ。暫しの沈黙の中、僕はその視線を皆のもとに戻すこともないまま、僕はそうつと瞼を閉じた。

目を睨れば、何も見えないから。もしかしたら無意識にそう思ったのかもしれない。

けれど、それでも4年前の子供のままの彼の顔が浮かんでいた。

サッカーもうまくて、何でも知識があつて。何より、あの年で大人負けな推理ができて。だから大人に一目も二目も置かれてて。ピンチになったらいつでも飛んでくる彼。

大人ぶってるけど、時々子供のように無邪気な面を見せて。ゲームは弱くて、音痴で。負けず嫌いで、ちょっとエッチで。みんなにとっても愛されていた、そんな彼。誰からも人望が厚かった、そんな彼。

最後まで、弱いところを見せなかった、そんな彼の顔がまるで映画のフラッシュバックのように次々と浮かんできて。僕は涙が出そ

うになって鼻の奥がつんと痛くなるのを感じ、指の腹でそつと目元を拭いながら目を開けた。

「え・・・？」

瞬間、僕は自分の目を疑った。

窓の向こうには、見覚えある人物がそこにいた。

茶髪で、髪の毛を肩まで降ろした女性。

2年前、高校とともに、そのトレードマークだったヘアバンドを『卒業』し、ほんの少し『財閥の娘』という風格が現れてきたなど思える彼女。

鈴木園子さんだった。

目を開けた瞬間、呆けたような顔をして僕を見つめていたその人は、目が合うと、いつものその、財閥の娘らしからぬ笑み・・・よく言えば夏の太陽のような笑顔に戻っていた。

『そっち』

細くて綺麗な指先が、自分たちのいる場所を指差す。ネイルケアをして綺麗なマニキュアをつけたその爪先に思わず視線が行ってしまった。慌てて彼女の口元に目を戻した。

『い、ま、い、く、ね』

冬なのに、口紅の発色のせいかな、よく潤い、やわらかそうなぽつちやりした彼女の唇がそう動いたのを僕は瞬時に読み取り、そしてこく、こくと、二度頷いた。

その合図に、再び彼女がにっこり微笑み、そして闇に消えた。

その瞬間、何かの魔法から解かれたようにはっと我に返る。

他の4人はそんな窓の向こうの様子に、気づくこともなかったようで、話題はいつの間にか違う話に変わっていた。

僕は小さく、しかし深いため息を吐いて、さっと前髪をかきあげ

た。

今、彼・・・コナンくんを思い出して泣いていたのを、園子さんに見られただろうか、という不安。そんな感情が僕の心にぐるぐると取り巻いていた。

そうであつたならば、何とも恥ずかしいことで。

「こらこら。その不良少年諸君、そんなところで油売つてると警察に補導されるよ?」

その声に、弾かれた弦のように僕はちゃんと背筋を伸ばすと、心の準備もまだ不十分であつたその状態で、僕はチラリその方向に目を向けた。

案の定、そこには先ほどの園子さんが立っていて、ちょっと演技の入った物言いで僕たちを見据えていた。お嬢様の普段着、のようなお洒落な格好をしていて。そんな姿に大人の魅力を感じ、普段の僕なら、きっとドキドキさせられていたことだろう。しかし、今は違った。

「あつ、園子おねーさん!」

「やべっ、みつかった!」

「・・・やべ、じゃないわよ・・・」

呆れたような表情で、園子は元太を一瞥すると、改めて僕の顔を見つめた。

その視線に、僕は射竦められていた。透明な、その光の映り加減で濃い青にも見えるその瞳が僕を映していて、何を話していいの言葉も見つからない。

「聞いたわよ、蘭から。新一くんの授業で、あんた泣きべそかいて部屋飛び出したっていうじゃない」

「泣いてませんよ!」

僕は慌てて抗議する。『泣きそうに』はなつたけれど。彼に涙は見せなかったはず。

「園子ねーちゃんにまで届いたってことは、明日どこまで流れるか楽しみだな、おめーの噂」

「ちよっ、元太くん」

そんな軽口に、僕は思わず顔を顰め、不快感を露にした。

「それで？ どうして貴方はここにいるの？ 蘭さんに教えてもらって、迎えにきてくれたのかしら？」

灰原さんがエクスプレッソを啜りながらそう尋ねる。相変わらず物怖じしないその言葉で。

礼儀を知らない、というより、むしろ知っていて敢えて使っているというか。

子供らしさが微塵も感じられない。・・・それもまた今に始まったことではないから、周囲もそれが普通と化してしまったのだけだ。でも。そして彼女もまた然^{しか}りで。

「いや、たまたまよ？ サークルの帰りに蘭からメールが来て。見つかったっていう話は聞いたけど、どこにいるとかは聞いてなかったし。もう合流したと思っていたけど。あんたたち、ちゃんと場所教えたんでしょうね」

園子さんの問いかけに、今までハンバーガーをばくついていた歩美ちゃんがうれしそうに頷いた。

「あ、新一お兄さんは、哀ちゃんに連絡頼んだんだ。私たちの中で一番お兄さんと仲がいいのは哀ちゃんだから！ ね、哀ちゃん」

同意を求める歩美ちゃんに対して、困惑したように灰原さんは眉を顰めた。

「・・・仲、よいわけではないけど。彼には間違いなく連絡したわ。・・・ただ」

「・・・ただ？」

何を言おうとしているのかわからず、僕たちは彼女に耳をさらに傾ける。

「ちよっとしたクイズをしたの。彼が大好きな暗号を解いてここに辿りついてもらうの。それがゲーム。すぐに居場所を教えるなんて

ちっとも面白くないでしょ？探偵なんだし、頭で考えて、足でしっかり動いてもらわなきゃ」

くすり、としたり顔で笑みを浮かべる灰原さん。そんな彼女に対して、しばし、目が点になっていた一同だったが、とうとう僕はぷつと噴出し、小さく笑った。・・・まったく彼女は、相変わらずなんだから、と。

それが切欠だったのかは知らないけれど、歩美ちゃんも元太くんも僕に続き、くすくすと笑い出した。

「何？」

「いや、先生が可哀想だな、と思って」

「可哀想じゃないわよ。きっと昔を思い出して楽しんでいるんじゃないかしら」

「光彦くんを忘れて？」

「白状だよな、ヤツも」

歩美ちゃん、元太くんが続いて呟いた言葉に、園子さんは「まあそれがアヤツの本性よ」なんて言って豪快に笑った。

こんなみんなを見ると、しくしくとした胸の痛みは少し和らいで。

そしてそれとは対照的に少しずつ笑顔が戻ってくるのを僕は密かに感じていた。

けど、また彼に会ったら。

この粉雪の下で彼に会ったらまた思い出してしまいそうで、また取り乱してしまいそうで。

・・・それが少し、怖かったけれど。

4 (後書き)

こんにちは、こつぶです。久しぶりに書きました。

新ちゃんを登場させる前に、ワンクッションおいて（笑）、園子ちゃんを。

彼女を登場させると華やぐのはやっぱり彼女の素敵なキャラなおかげなんでしょうね。

ではでは、ここまで読んでくださってありがとうございます！感想お待ちしております！。

「・・・あ、蘭？うん、そう。今子供たちと会ったの。うん・・・うん・・・。それで？新一さんと連絡とれた？・・・えっ？電源切られてる？・・・何やってんのよ、もー。可愛い可愛い奥さんになぐ線まで切っちゃうなんて、あんたのダンナ一体どーゆうしんけ・・・あは、ごめんごめん。うん。・・・うんうん」

僕の隣で、園子さんは羽織ったままだったコートを脱ぎ、オーダ―したシェフお勧めという『とろとろオムレツ』が来るのを待ちながら電話を掛けている。相手は、園子さんの無二の親友で、先生の恋人である蘭さんだ。

話の展開から、先生はまだ僕たちのことを探しているみたいで。灰原さんのクイズに意地になっている、・・・まるで子供だな、と僕は内心笑った。そして、そんな彼のやること全てが、『彼』の性格瓜二つで、ほんと困ってしまう。

先生が、僕たちと1年過ごしたと友達、『コナンくん』に似ていることはもう百も承知だから。お願いだから今日は『コナンくん』のことをこれ以上思い出させないで欲しい。

果たして、こんなことを考えるのは僕だけだろうか。僕がただナ―バスになっているだけだろうか。それでも、きつともうすぐ先生は『コナンくん』のようにやってきて。すいすいと暗号を解いて得意満面な笑みを向けてくるのだろう。そしてまたその笑みと、この粉雪をバックにして僕はどうしようもない胸の痛みに苛まれるのだろう。

「・・・円谷くん？」

その声にはっと我に返り、僕はその声の元の人物、斜め前にいる灰原さんに目を遣った。

「何を考えてるの？」

「・・・いえ」

「・・・そう・・・」

それだけ言うと、彼女は目の前のコーヒーに口をつける。

「・・・早く、雪、止むといいですね」

僕の言葉に、彼女はコーヒーを啜り、そしてそのまま小さく息を吐いた。あったかい空気が僕の手になじりそうで、ほんの一瞬どきりとしてしまう。・・・こんなときでもその感情が浮かんでしまふことに心の中で苦笑いを浮かべつつ。

「雪、嫌い？」

歩美ちゃんがオレンジジュースの中の氷をストローでかき回しながら、視線をそのグラスに向けたままで尋ねた。何気なく、に見えるが実際どうなんだろう。

「嫌い・・・ではないです。・・・ただ」

「おれは、嫌いだな」

ボソリ、隣にいても聞こえるか聞こえないかの音量で、僕が言葉を選んでる間に元太くんが答えた。

足を投げ出して、少しいじけたように視線は遠くを見据えたまま。そんな彼を見るのは珍しいことであって。

「・・・何故、ですか？」

彼もまた、自分と同じ理由なのだろうか。僕と同じ気持ちでいるのだろうか。それとも単純に、外食ができないとか、遊びにいけないとか、そんな理由なんだろうか。

その真意が聞きたくて僕は一向に頬を膨らませ、口を尖らせたままの元太くんの表情だけを見つめていた。

「だって、だってさ・・・」

彼が次の言葉を言おうとしたとき、・・・その空気がまた変わった。

始まりはほんの些細なこと。

静かな音を出して自動ドアが再び開いた。ただそれだけのこと。

そもそも、店の自動ドアは大きな植木鉢のコーナーで仕切りを作り、誰が入ってきたかはわからない。けれども結構入り口から近い位置に席を置いたので、自動ドアが開く音は幾度となく聞こえてくる。その度に、客数が少ないのだから奥の席にすればよかった、なんて考えてしまう。せっかく温まった手や足が人の出入り^{でい}で入り込んでくる冷気によって、冷やされてしまう。そんな気がして仕方なかったからだ。けれど、今更移動しようと言うこともできず、そんな気分にもなれず、今僕はおとなしく座っているのだけれども。

兎に角、だ。

雪も降っているこんな日に人が出歩くのは少ないとは感じつつも、今は夕食時だし、普段は人通りの激しいこの通り。そこそこ繁盛しているこの店に客が入ってくるのを僕らはそこまで気にしていなかった。なので、その人物を確かめようとしなかったのに。

カツ、カツ、カツ・・・と近づく足音。そして、

「・・・たく・・・探したぜ。」

その人物の声に、僕ははっとして肩越しに振り向いた。

「・・・せん、せえ」

一瞬、声が掠れた。空気が漏れているような感覚。喉が渴き、頭が真っ白になっていき。

・・・まだ全然心の準備ができてなくて。

そう。

すぐ脇には彼が、立っていた。

僕をこの雪の中探し回っていた、新一先生が。

僕がどうしてもこの時期避けてしまう相手、そして今日思わず逃げ出してしまった相手が。

僕の両親以外で一番先に憧れた相手にそっくりで。・・・そして2番目に憧れた相手で。

好きだけど、ちょっと苦手で。

けどやっぱり憎めない、そんな人。

そんな彼が、ちょっと怒った顔で、僕をしっかりと見つめていた。

★★★

「・・・遅かったわね。・・・23分08秒」

灰原さんが自分の腕につけられた時計を見ながら淡々とその言葉を彼に言った。

その言葉に、先生は困惑顔になる。

「バーロ、白馬みたいなこと言うなよ」

「あら、あの人は0コンマの桁まで出してたでしょ、そこまで時間オタクじゃないわよ。ただ、私のクイズに要した時間を計ってみただけ。クイズや暗号なんて子供時代幾度もやったはずじゃなかった？それとも探偵業や子供相手の塾の『先生』やってて。すっかりそういうことを考える頭は衰えてしまったのかしら？」

「ばっ・・・んなわけねーだろーが！今日のは急いでたから・・・。声も遠くて聞こえづらかったし。聞き取りづらかった暗号のパーツを推理しながら進めたから時間がかかったんだよ」

「あらあら。それなら電話ですればいいことじゃない。自分から連絡を絶った癖して」

「いや、考えるのも楽しかったさ。それもまたゲームみたいなものだからな」

「嘘ばかり。・・・どうせ問題をもう一度教えてくれっていうのにプライドが邪魔をして聞けなかったただけでしょ」

「ぐっ・・・」

言葉に詰まる新一先生に、そして、してやっつたりのクールな灰原

さんに、僕らはぽかん、としてそんな状況を見守っていた。確かに灰原さんの言うことは最もだから何も言い返すこともないのだろう。けれど、子供に言い負かされる『あの』先生が何だかおかしくて。いつ見ても笑顔がこぼれてしまう。

そしてやっぱりその状況に耐えられなかったのか、まだ電話中の園子さんがまず噴出した。

「あはははは、あはっ・・・ああ、ごめんごめん。ごめ、今すごく面白いの見ちゃったから・・・。え？いや、小学生女兒に尻に敷かれてる22歳男性の図・・・。うん、そう。あんたのダンナ」

静かな店内響きわたるほどのその笑い声と共に、園子さんは受話器を持つ手を持ち替えた。相変わらずの女性陣に言われたい放題の新一先生は、男の面目が丸つぶれなのを自覚しているのか「うっせえよ」と小さく呟いた。そんな先生の様子にそこで思わず噴出してしまう。

不思議と落ち着くこの時間。

あんなに、今この状況で先生と会うのは恐れていたのに。こうやってうっかり笑わされたりして。

そういつもと同じように過ごせるのは、ここにいるのが先生と僕の2人だけじゃないからだろうか。

みんながいるから、僕はこうして、『僕』でいられるのだろうか。

「・・・くおら」

「てっ」

軽い拳固けんこが頭に直撃した。コツンと軽い音と共に、痛みが頭に響いていく。

いつの間にか沈んでいた顔を上げれば、先生が少し怒った顔で僕を見つめていた。一瞬のうちに緊張が走り、僕はまるで飼い主に怒られた犬のようにしゅんと項垂れて。

「心配、かけさせやがって……。あとでしつかり『オトシマエ』つけてもらうからな」

「え？」

「夜の、ドライブ。気分転換になるだろ」

にやり、と白い歯を見せて笑う彼に、僕は一瞬言葉を失った。

「……えー！？ 光彦くんだけずるーい！」

「なんで光彦だけ！？」

抗議する元太くと歩美ちゃんに対して、先生は困惑したような笑みを浮かべて、それから答えを出した。

「歩美ちゃんはもうすぐ中学生になるんだから。いくらなんでも夜遅くまで、しかも男と遊ぶのはご両親心配するし。元太は元太で冬休みの宿題さえ進んでねえじゃねーのか？ こんなところで道草くつてる暇なんてねーんじゃ……」

「ぶー」

涙目で訴える歩美ちゃん、そして明らかに不機嫌な元太くん。そんな二人に対して、灰原さんは我関せずというように、熱いコーヒーを再び啜っていた。

「家までは送ってやつからさ……。ったく、おめーらホントいつまでたっても変わんねーんだから……。早く帰れよ」

怒られるのは俺なんだから、と、うんざりしたように肩を竦める先生の横で、園子さんはあくまでギャラリィ。にやにやと興味深そうに見つめていた。

20歳を越した成人男女2人に、小学生児童4人。

時刻は8時を過ぎていて。

こんな粉雪の日に外に出て集まった傍から見れば不思議な組み合わせ。

一体どんな関わりに見えるのだろうか、なんて。僕は暢気に考えてしまっ

しかし1時間後にはまるで天国と地獄のような言葉を聞かせられるだなんて、そのときは格別思いもしなかった。

後になって考える。

僕は少し、考えが甘かったのかもしれない。

5（後書き）

久しぶりに書いた小説。いかがだったでしょうか。
ようやく新ちゃん先生に再会しました。

次回は車の中での会話を重点に置かせていただきます。さてさて、
みっちゃんは新ちゃんとどんなお話をするんでしょう。それをこれ
から考えたりしちやったりして・・・（苦笑）

それでは、次回はいつになるかわかりませんが、これからも末永く
お付き合いよろしく願います。

空から降る粉雪はいつのまにか草木を白に変えていた。

未だ道路には落ちては解けて、白に染める気配はないけれど、僕はいつまでたつても降り止まない、そんな曇天をただ恨めしい気持ちで眺めていた。カーウインドウから顔を出して。

「あぶねーから首引っ込めとけよ。ちょん切られても知らねえぞ」

「『元高校生探偵、哀れな末路 運転中知人少年の首を』」

「・・・やめてくれ、演技でもねえ」

後部席から聞こえるその声に、げんなりとしてその言葉を被せる先生は、運転席でハンドルを握っている。そして、助手席には僕。後部席には、先生に茶々を入れた灰原さんと、その横に園子さん。元太ちゃんと歩美ちゃんは先ほどそれぞれの家に送り届け、夜9時半を回った今現在、園子さんの家に向けて車は走っている。

「それで？ 蘭とはあのあと連絡とったんでしょうね」

運転席のすぐ後ろの後部席から身を乗り出すように園子さんは運転席の先生を覗いた。

「あ、ああ。・・・さっき夕飯は食べてくるって伝えたから朝メシの支度だけして、自宅に帰^{いえ}ってるんじゃないか？」

「あ、朝メシの支度っ!？」

その言葉に反応し、僕が口を開きかけるよりも前に、園子さんはさらに食いついた。

「まーVVVお熱いこと。あんたたちホント妬けるわねえVホント、何年も夫婦やってるのに。・・・いつまで経っても新婚ホヤホ・・・」

「・・・いや、結婚してねえし」

すばっと園子の言葉を切り捨てておきながら、先生の顔はやっぱ

り赤い。

そしてそれを冷やかす園子さんはホントに嬉しそうで。大きな目が蒲鉾かまぼこのように半月上になって、頬はぷっくり上へ持ち上がり。自分のことのように幸せそうに笑って。ホントに蘭さんが大切なんだなあ、なんてこっちまで嬉しくなってしまう。

実際、先生と蘭さんは、幼馴染という間柄のときから、両親不在ということ、園子さん曰く『通い妻』をしていたそう。一度事件で連絡があまり取れなくなり、その関係は薄くなるかと思いきや、その空白の1年を埋めるかのようにさらに絆は深くなって。傍目からではあからさまに、園子さんがいう『ラブラブ』をしているようには見えないけれど、きっと僕らが知らないところで二人は……。

「何……円谷くん、顔、赤いわよ……？」

怪訝そうな顔をして僕を見つめる灰原さんに僕は自分の世界から抜け出すと、慌てて「ちよつと暖房が聞きすぎてたんですよ」と言葉を返した。

「ふうん……。蘭と新一のこと考えてたら、どーせいつちよまえに変な妄想でもしたんじゃない？」

「違いますよ！」

一緒になって、意地悪っぽく笑う園子さんに僕はムキになって声をあげる。そんな僕らの様子を、先生はただ微笑わらって見つめていた。

★★★

「それで、ドライブって一体僕は何処まで連れていかれるんですか？」

園子さんを送った後、車は僕の家から反対方向に連れていかれ、聊さかか戸惑っていた。同じ小学6年生の女の子だというのに、灰原さんは未だ彼の運転する車に乗っていて、やっぱり彼女は歩美ちゃんとも、もちろん、彼と同一年の園子さんとも違う、『特別』なんだ

ろうな、とは思ったけれど。だからといって恋愛感情というものは二人の間に感じることはなかった。それは、以前僕が『コナンくん』と灰原さんに抱いた間柄にも似ていて。あのころの僕が例えた、『ミステリアス』な雰囲気。

僕はちらちらと、運転席で真正面を向いたままの先生と、後部席で肘掛に肩肘をついて、外を見つめる灰原さんを交互に見ていた。

「別に怪しいところじゃないさ」

「元太ちゃんと歩美ちゃんも、園子さんまで置いて僕ら三人での夜のドライブなんて・・・怪しすぎるに決まってますよ・・・だって、先生と灰原さんですよ？」

「何だよ、その例え」

冗談交じりに言った僕の言葉に、先生は思わず鼻先で笑った。

けれど、いつも思っていた。未だ謎をかかえている灰原さんと、その事情を何故か知っていたような先生。彼女がこの街に来たときは、彼はまだ行方不明で面識がなかった筈なのに。しかも年齢も離れたこの二人が、コナンくんの親戚というだけで、どうしてこんなに仲がよいのだろうか・・・仲がよい、なんて例えたら、きっと二人は怒るに決まってるけれど・・・でも、少なくとも僕はそう感じてるから。

「あなたには聞いてほしかったのよ・・・まだまだ告げるにしても早い時期だとは思った・・・けど、今日の貴方を見てると、言わずにはいられない気がして」

突然、今までの柔らかな空気を崩すような、そんな消え入るような、悲しげな声が後ろから聞こえた・・・勿論、灰原さんの声だ。

「へっ？」

満面笑顔だった僕の表情が俄かに凍りつく。

「受験、もうすぐでしょ、だから・・・あのときのことは一切忘れ

てほしいの」

「あの時？」

「忘れるわけにはいかなーかもしれないけどな」

諦めたような彼の声。そして僕はようやくこのドライブの意味を知る。

どこに行くわけではない。何をするわけでもない。
ただ、僕がここに連れてこられた意味は・・・。

3人だけの、秘密の会話。

あのときの、トラウマ。

「あなたに話しておきたいことがあるの」

車の中、暖房のヒーターの音とエンジン音だけが静かに響く。そんな暗闇の中。

彼女の声がやけに耳に張り付いていた。

6 (後書き)

どうも、こつぶですー。今日はちょっと更新はやめです。前回がちょっと長めだったので、少し物足りないかもしれません。ごめんなさい。

やっぱり園子ちゃんや哀ちゃんの新ちゃんのやりとり書くの楽しいなあ、大好きだなあ、と思いながらウキウキしながら書いてました
(笑)

雨と老女の方もがんばります(笑)最近忙しくって。リハビリみたいな感じで書きなぐってるカンジだからこっちを中心に進めてしまいかもしれません。余裕が出来たら、雨と老女もがんばります。すみません・・・。

それでは、ここまでお読みいただき、ありがとうございました！お時間がありましたら、感想をいただけるとすごく嬉しいです。それでは、失礼いたします。

「あなたに話しておきたいことがあるの」

そう言った灰原さんの顔は少し思いつめた表情カオをしていて。

車に乗車する前から暖めていたおかげで車内は暑いくらいだったのに。なぜか緊張でぶると震えた。

話しておきたいこと。

それは、彼の『江戸川コナンくん』のことじゃないか、僕は頭のどこかですぐに察知していた。けれど、それを自分の口から聞き出すことはできなかった。

心の準備は、まだできていないのだ。

「……僕が……聞かなきゃ、駄目なんですか？」

震える喉を誤魔化しながら僕はその言葉を振り絞った。

何で今、この日に、この時期に。こんな話をこの2人は切り出すのだろうか。

「あの日のことなんて……。もう何も聞きたくないんです……。コナン君とは、楽しい思い出として、残しておきたいんです」

俯きながら、拳をしっかりと握り締めながら、僕は懸命に答えていた。そんなとき、後ろで小さな溜息が漏れる。勿論、灰原さん。

「ねえ……。あなたにとってどれだけ彼が大きいかしらないけど」

「……灰原さんだって……！」

振り返り、思わず声を上げて彼女の声を遮っていた。自分でもびっくりするような大きな声で、運転する彼も驚いたように軽くブレーキを踏んだ。

一瞬、車体が大きく揺れて、僕は平静を少し取り戻す。

「……灰原さんは、コナンくんがいないことを寂しいとは思わな

いんですか？」

ホントは、言いたかった。「あなたが一番、寂しいと思っていた筈ではなかったのですか」と。

けれども咄嗟に思いなおす。だって今では、彼女より僕たちの方が引き摺っているような気がしてならなかったから。それは、彼に似たこの新一先生の存在なのか、とも思ってしまうのだけれども。それが自分にとっては悲しくて、不満で仕方なくって。

「寂しくないわ。彼は生きて存在るもの」

動揺も何もない。ただ、いつものように、どこか悲しげに自分を見つめていた。

「聞きたくなければ別にいいんだ。・・・ただ、その胸のトラウマ、どうにかしなきゃって思ったから」

運転席で先生がボソリ、と呟く。

「トラ・ウマ」

僕が彼と過ごした時間。どんなに彼を大切に思っていたか、憧れていたか、嫉妬していたか。先生は知らない筈なのに。遠い親戚だと言っても一度も顔を合わせたところを見たことがないのに。一体先生は彼の何を知っているというのだろう。

「わかってるの。・・・貴方だけじゃないのよ。・・・傷を抱えているのは。放っておくのが一番かもしれないわ。傷口を抉るつもりは毛頭ないし。・・・そしてそう考えてここまでやってきたわ。・・・でも」

「もう限界だと思った。・・・俺の顔見て逃げ出したときに」

「逃げ出してなんか・・・」

「『逃げ出した』・・・だろ？」

まっすぐ進行先を見据えながら、核心を突いたかのようにはっきりと先生は言った。まるで犯人を追い詰めるときのように淡々とした表情で。しかし一瞬だけ眉が悲しげに動いたのを僕は見逃すことをしなかった。

「受験が近くて何でも神経質にいろいろ考えちゃってるかもしれない。……だけど、このままじゃ、不味いだろう？」

「……え？」

「コナンに似た少年が、粉雪降る試験受験日にすれ違いでもしたら？ おまえは動揺して受験どころじゃなくなるだろう」

「そんなこと……」

「あるかねえだろう？ それが例え何%の確率だったとしても」
そのほんの一瞬の出来事によって。

他のどの受験者がその彼とすれ違っても、何も起こらないだろうけれど、もし自分がその少しでもそっくりな少年と遭遇したとしたら、若しかしたら……。

「居ないわよ、『彼』似の男の子なんて。貴方があの彼女と子供でも作らない限り」

後ろで、灰原さんは両腕を組み、涼しい顔でそう言い放つ。確かに……なんて一人思う余裕も今の僕には少しもなかったが。

「そして、今年男の子ができたとしても、『彼』のような子に育つのは少なくとも6，7年後。大学受験の時じゃないかしら。ずいぶん気の長い話ね」

皮肉的な笑いを浮かべ、灰原さんは溜息をつく。

「だあかあらあ、何%の確率だっつってるんじゃないか……。オメーは何しにきたんだよ、こいつに話をするつもりだったんじゃないのか!？」

「回りくどい言い方にいい加減うんざりしただけよ。そんな要らない心配をするよりも、確実に起こりうることを彼に伝えておいた方がいいでしょ……」

呆れたように灰原さんは、ほんの一瞬だけ視線を落としてそう言う、そんな二人の言葉に何も言えずに茫然としていた僕の顔をじっと見つめた。青い瞳が僕を見据える。そして僕はそこではっと我に返る。

「そんなことはなかったとしても。……円谷くん。今のままじゃ

絶対試験はうまくいかない。彼のことを思い出し、プレッシャーに負け。・・・あなたはつぶれる」

「・・・わかってます」

そう、わかってる。

だけど、どうしようもないじゃないか。

「あなたがどう話しても、彼がなぜ僕らから離れなくてはならなかったか、そんな話を聞いても今の僕はあのときの辛い思い出が蘇るだけで・・・何も解消はしないんです」

どう考えても、彼が僕の前に現れない限り。

いや、現れたとしたって。・・・きっと、この胸の傷は消えない。
トラウマ

「そう・・・。じゃあ、彼があなたにどうしても会いたい、って言っても？」

パリン。と僕の中のどこかで何かが壊れる音がして。僕ははっと灰原さん、そして僕の隣で先ほどから黙っている先生に目をやった。灰原さんは僕の顔を見たまま表情を一切変えず。

先生はずっと運転方向を見据えたまま口を一文字にして。

頭の中が真っ白になっていた。まだ降り止まぬ、この粉雪のように。

7 (後書き)

次回で、ようやくの新ちゃんの告白が入りますー。
ここがメインなので、ここを超えればあっという間。

12, 3話くらいで終わると思います。
雨と老女もがんばらなくっちゃ！

それでは、ここまでお読みいただき、ありがとうございました！

8 (前書き)

すみません。

2月9日午前9時現在。えと、最後の部分、みっちゃんの心の描写を大幅加筆させていただきました。

深夜2時に投稿させていただいたこの小説、起きたら新しく何か物足りなかった気がしてきて。

今の時間までに見ていただいた50人の皆様。本当に申し訳ございませんでした。ご確認のほどをお願いします。

「そう……。じゃあ、彼があなたにどうしても会いたい、って言っても？」

灰原さんは試すような表情で僕を見つめていた。
頭の中が真っ白で。

僕は暫く何も答えることができなかった。

「おい、灰原」

信号が赤に変わったとき、車体は止まり、先生が見かねたように助け舟を出してくれた。

「何もそんな急がせなくても……。今日はそれでいいじゃねえか。こいつの心の準備ができてねえのなら……」

「そうだけど……」

一瞬、何かを含んだ表情で灰原さんは彼を上目遣いで見た。僕は、その何か言いたげな表情が気になって。そんな表情カオをしたら、よけい気になるじゃないか。それがただのたとえ話だとしたって。そんなたとえ話をする時点で、まだ灰原さんや新一さんは僕たちに内緒でコナンくんと通じていたんじゃないか。そんなことだって考えてしまう。

「彼に、会えるんですか？」

「……。会えるわよ。だから聞いてるんじゃない」

「会えるっつーか……」

困ったような顔で、先生は信号が青に変わるのを待ちながら、前方を向いたままで顎を指先でとんとん、と軽く叩く。

「会えないんですか？」

「いや……。会えるっちゃ会えるけど……」

困惑したような表情で、先生は少し顎に人差し指を置いたまま、

考え込む。

「・・・前・・・進んだわよ」

信号が青に変わり、灰原さんがそっと呟いた。それに気づき「おう・・・」と呟いて車体を発進させる。

「・・・おまえは、・・・光彦は本当に会いたいのか？・・・俺らはずっと、おまえがあいつにあって、聞きたいことがあるんじゃないかかと思っただけから・・・。それをずっとトラウマに抱えて、聞きたい気持ちを押さえ込んで、どうしていいかわからずにずっとそうしているんじゃないかかと思っただけから、・・・できることならせめて受験前に楽にしてやろうと思って連れてきたんだけど・・・」

迷惑だったかな、と彼は申し訳なさそうにぼそりと言った。

「いえ、そんなことは。・・・確かにあのときのことはトラウマに感じていることは確かですし。・・・できるなら今後一切あの日のことを忘れることができるように・・・。思い出のひとつとして変えられるように・・・。すっきりさせたいのも正直あります。・・・でも、反面、・・・怖いんです。彼に会うのも、あなたたちにその話を聞くのも」

もしその話を聞いたら、僕は一体何を思うのだろう。

絶望？それとも、希望？

天国か、地獄か。

僕がたどり着ける場所は、果たして何処なのだろう。

「・・・でも、そうしたらあなたは・・・。逃げ続けることになるでしょ？」

「え？」

「あの日のトラウマから、逃げ続けることになるでしょ？いつまで経っても、粉雪が降る夜にはあの人のことを思い出して。いつまでも辛い気持ちになり続けるでしょう？少なくとも、今のあなたはあの子たちよりもずっと彼に何かを感じてる」

「……」

涙が出そうになって。

灰原さんからそんな言葉を言われるのが辛くて。僕は唇をぎゅつと、かみ締めた。

「……『逃げるなよ、灰原。……自分の運命から、逃げるんじゃないぞ』」

「……はっ？」

「……え？」

思いも寄らぬ言葉が、灰原さん自身の口から出されたので、僕は心底驚いた。勿論、先生も。そしてそんな僕らの様子に、灰原さんはくすりと笑った。

「昔、私が道を誤ったとき、あの人が言ってくれた言葉。……あの人はもう、忘れてるでしょうけど。……ねえ、工藤くん」

「……さあな」

何故か居心地の悪そうな彼と、それを見て少し嬉しそうな灰原さん。けれども、彼女はすぐに真面目な表情になり、僕を見つめた。

「……私が抱えていた問題と、あなたの今のそれとは全然違うものだとは思う。……あなたの抱えているものは失礼かもしれないけど、正直、それほど大きなことじゃない。もし、彼との別れがあるあなたの運命を、うまく進むはずだった人生を捻じ曲げているのだとしたら。それを元に戻すのは……トラウマを克服するのは、今がチャンスじゃないかしら」

「……ホントは、俺らがすっきりしたいがためなのかもしれないけど……。おまえらの辛そうな顔、もう見たくねえから……」溜息交じりに言う彼の言葉に、僕はただ何も言えなくなって。

ぼんやり外に目をやれば、遠くにトロピカルランドのネオンの光が見えていた。ずいぶん遠くにきてしまったようだ。

ふう。……と僕は小さく、しかしとても深い溜息をついた。

「わかりました。・・・お願いします」

僕の中でようやくその事実を聞く心の準備ができた。決心が固まったのだ。

その瞬間、ほっと空気が和らいだ気がする。

「そっか、わかった」

先生はほんの少し、微笑んだ。

先生が、または後部席に座っている灰原さんが、僕に何を教えてくれるのかは知らない。そしてこれから向かう先で一体何が待ち受けているのかも。

若しかしたら、その場所でコナンくんが待っているかもしれない。「久しぶり」だなんて言って笑ってくれるのかもしれない。そんな彼を見て、平常心でいられる自信はやっぱりまだないのかもしれない。でも、覚悟を決めていくしかないと思った。先生や灰原さんが僕にチャンスを与えたのだから。秘密主義の二人が僕だけに何かを打ち明けてくれるなんて、二度とないことだと思うから。そして、『彼』に会えるとなれば、そのチャンスもまたもう二度とないのかもしれない。

本当は、『彼』に会いたかった。

面と向かって、真正面から話をしたかった。

こうやって、第3者から話を聞くのではなく。

僕たちが『彼』と出会ったのが『偶然』でなければ。そして彼と別れたのが『意味のあるもの』となれば。

僕は彼の口からその話を聞いてみたい。

こうやっていつまでもあのことを思うのは、若しかしたらそういう気持ちもあったかもしれない。転校そのものが嫌だったのではなく、彼と離れるのを寂しいからとこんなに彼から逃げていたわけではなく。

何も言わずに、彼が抱えた全ての物、何も置いていかずに、僕たちのところから去っていったから。置いていったのは転校の際の、『別離（別れ）』の言葉。そんなわけだから、全て彼へのコンプレックスと、猜疑感などの、心のしこりは取れぬままで。

彼が全てをあのとき話していれば、僕はここまで変わることがなかったのではないか、なんて今では考えていた。

そして、もし僕と同じように少年探偵団があのときのことに苦しめられているのであれば、きっと全て、同じ理由。

だけどそれが無理なら、彼に会うことができないのなら、それもまた仕方のないことだとはわかっている。

それでも、少しはこの傷の痛みが緩和してくれれば。彼を思い出すときこの胸が少しでも疼くことがなくなれば。

「・・・光彦・・・到着したぞ」

その声に僕ははっと我に返り、改めてその場所を見て、僕は思わず驚嘆していた。

まさか、今の僕たちがそこに来るとは思ってもみなかったから。

「・・・此処が、俺たちが向かいたかった場所だ。・・・まさかオメーが断るとは思っても見なかったから。このまま、俺たちの話をきかねえなんて言ったらどうしようかと思った」

先生は苦笑いを浮かべながら、器用に駐車場の車庫入れをはじめ。今の時間は夜の10時をもうすぐ回ろうとしていた。その駐車場を出ようとする車が多い中、今からこの駐車場に入るなんて・・・もう『閉園』になるだろうというのに。

そんなおどおどあたりを見渡す僕に気がついたのか、先生はおかしそうに失笑した。

「ああ・・・昔事件を解決して、そのあたりからこの社長さんと顔見知りになってるんだよ。・・・あんまり気にすんな」

そう、その場所は。何度も足を通わせた、僕らの夢の国。

『トロピカルランド』。

「・・・ここですべてを話そう、ことの始まりも、みんな」

そこにいる誰もが、そこにある何ものが浮き足立ったこの『街』で、この『国』でこんなシリアスな話をするのは何となく不可思議な気がして。なぜ、先生がこの場所で話すことに決めたのか。そんな湧き上がる好奇心が僕の胸を深く突いていた。

8 (後書き)

すみません！告白、次回でしたっゝ（；、 ㊦ ●）ノあわわ

うそ、教えちゃいました。いや、まとまりがつきませんでしたー＞
＜！

でも、今回は必ず告白、というか延々語らせますから！独白っていうものになるかはわかりませんが（笑）お付き合いのほどお願いします（おどおど

ここまでお読みいただき、ほんとにありがとうございました！

追記..

7月9日朝9時、光彦最後の心理描写大幅加筆修正させていただきました
ましたこと、再度、肅にお詫び申し上げます。

もうすぐ閉園の時刻だ。にもかかわらず、僕らは車から離れ、人の流れを背に言葉もなくその場所に立ち尽くしていた。

「行こう」

先生がそう呟くように言った言葉。それに操られているように、僕はゆっくりと歩き出した。閉園の音楽が風に乗って流れてくる。その音楽を耳にしながら、人の波に逆らって僕は駐車場を出て、トロピカルランドの入り口から場内に足を踏み入れる。こんな閉園間際に何の用だろう、と怪訝そうに僕らを見るカップル。きっと忘れ物とか落とし物を探しているのだ、そんな風に思われているのだろうか。僕は何となくその視線からの気恥ずかしさで下を見ながら歩く足を進めた。

誰もいなくなった遊園地。まるで場内宝石箱を散りばめたかような煌びやかな装飾、そして玩具箱のような町並みに、華々しい音楽。一瞬、・・・ほんの一瞬だけ心を奪われてしまう。久しぶりに入った『夢の国』。これら全部が今は自分たちだけのものだなんて。

けれどもそれはまるで今までのことが夢だったように、突然やってきた。

本当に、突然に。

走るのを止めた馬たち。踊るのを止めた踊り子。飛ぶことを止めた空飛ぶ象に、暴走を止めた機関車。音を失い、光を失った町並み。魔法をかけられたように一日中働き続けたものたちは全て、まるで『死』してしまったかのように一気に停止して、静寂を迎え入れた。フェードアウトされることもないまま、突然に。

まるで楽しい夢から、何者かに悪夢に引きずり込まれたような、そんな面持ちで僕はそこにいるしかなくて、暫く立ち尽くしていた。『夢の国』なんて讃えられているこの場所も、これでは『死の国』『眠りの国』だ。そんなことを思ってしまう。

「ったく・・・閉園後に用事で顔を出すって言っといたのに忘れやがって。メンテナンスもしねえのかよ、ここは・・・信じられねえ」

事故起して、挙句訴えられてもしらねえぞ、と、苛立ったように先生は前方でそう言葉を吐き出した。その横で灰原さんは一切動じない表情で彼を見つめる。

「入り口のお知らせ板に、明日休園って書いてあったわよ。明日に全てやるつもりだったんじゃない？」

「・・・あーっそ。・・・絶対^{ぜってー}今度来たとき社長に文句言っでやる」先ほどまでの張り詰めた空気はどこにやら。前方で八つ当たり気味にぶつぶつと呟く先生に対して、不謹慎にも僕は思わずぷつと噴出した。

そして、それをどこかで聞いていたかのように、暗闇から光へと一気に華咲いた。音楽こそ鳴りはしなかったが。

「今更思い出しても絶対許さねえ」

彼は天を仰いで不貞腐れ気味に再びそう呟いた。

★★★

電気がつき、安心したように僕らは歩く足を進めていく。

何処に行くのだろう。彼らの真意は未だ掴めぬまま。

「なあ。・・・ここ、覚えてるか？」

このまま何もなかったらぶらぶら歩いているだけなんだろうか。そんな気がして、少し気が抜けていた部分もあったから、先生のその言葉に、僕ははっと我に返った。

目の前にあったのは、『ミステリーコースター』という絶叫ライドもの。それに乗ったら、降りるまでの3分の間に、絶叫の恐怖とお化けや妖怪の類の恐怖を一度に味わえる、そんなアトラクションだ。

確か、僕が小学1年生の時、この場所で殺人事件が起きて。それから2年半営業を閉鎖したというのをテレビのニュースで聞いたことがある。営業をリニューアルという形で再開したという話は聞いてはいたが、いくら流行の話に敏感な僕たちであっても、誰一人あれから一度も足を運ぶことはしなかった。なぜなら、あの日、あの場所に僕らはいたから。関わることすれなかったが。

「ええ。曰くつきの場所ですよ、確か。……確か殺人事件があつて、そしてそれを解決したのは」

誰、だったか。確か若い探偵だった気がする。警察とかじゃなくて。確か……

「それ、解決したの、俺なんだ」

ボソリ、と先生が呟いた言葉に、僕は「ああ」と呟いた。

そういえばそうだったような気がする。小学1年生で。初めて子供たちだけで探検して。その場所で起こった殺人事件で解決したのは高校生だったような。それが今はイギリスの大学にいて、来年からまたアメリカの犯罪心理学を学ぶために2年大学院に留学するといわれる『白馬探』か、目の前の先生『工藤新一』か。そこまで詳しくは覚えることはしなかったけれど。

「ここは俺にとってももつとも曰くがある場所なんだ。俺の人生で欠かすことのできない思い出の場所。ただ、俺が事件を解いたってだけじゃなくて、もっと……そして、『あいつ』が生まれる切欠を作った場所」

「『あいつ』？」

誰のことを指しているのか。彼は皆目見当がつかず、思わず眉を顰めた。

「……おまえらの友達だよ。そして、光彦。……おまえが『こ

こ』にトラウマを作った大元の原因^{タネ}」

「・・・え？」

先生は強く自分の左胸部を親指で叩いて見せた。そしてその言葉に僕は耳を疑る。

先生のいう『あいつ』。それは僕の思う『彼』まさにそのものだった。けれど、先生の言う意味がわからなくて、僕は暫しその言葉の意味を探っていた。

「・・・江戸川コナン」は、俺だ」

「・・・っ!？」

ぴゅううと吹く風が僕の頬を素早く通り抜けた。それに混じって、力は弱めても未だ降り続く凍てつくようなこの冷たい粉雪も頬を掠め、また、張り付いて、その体温でじんわり解けていく。そしてその冷たさで彼の言葉が夢の中の言葉ではないのだということに僕は臃気を感じていた。

冗談だと思いたい。けれどどこかで「ああ、やっぱり」そう思える気持ちもあって。僕は言葉を失くし、暫く彼の顔をただ見つめることだけしかできなかった。

9 (後書き)

すみません、ゆっくりペースでっ><

ていうか、『俺が江戸川コナンだ』って、全然進んでないじゃん
><！ってきつとどっかからお怒りの電話が殺到しそうです！キ

(＊。！。＊) ！キ ↑おい。

いや、本来ならば進むはずだったんですけどね。前半とかもって暗い話になってくはずだったのですが、・・・ちよつと小休止(↑こればかりですみません)

これからさらにゆっくりになっていくと思います。卒業式の準備とか製作とか、来年の準備とかで忙しい毎日っ><。もうひとつ企画用に明美さん&志保さんの作品を仕上げたいと思ってまして。ああ、雨と老女もまだなのに！><

ここまでお読みいただきまして、ありがとうございました。次こそは展開早めていきたいです(どーん

「『江戸川コナン』は、俺だ」

そう呟いた目の前の先生に対して、僕は一瞬だけ耳を疑った。

そして彼の隣には何事もないような様子で、逆に僕の反応を伺っている――そんな反応の灰原さん。

どこかで理解^{わか}ってはいた。

いつも頭の何処かで感じていた。だから彼の話を聞いても「ああ、やっぱり」と思える自分もいて。

けれど、それはほとんどは現実では起こりえないこと。起こるはずがないのに。

「どういふことなのか・・・順序だてて説明してくれませんか？」

嘆願するような僕の心からの言葉に、彼はゆっくりと頷いて見せた。

★★★

目の前の状況から、『工藤新一』Ⅱ『江戸川コナン』という話を灰原さんも知っているということはすぐに理解できた。きつとどいう経緯で彼がそうなったのか、何もかも彼女は知っているのだろう。何年間も二人だけの秘密にしてきたのだろう。そう考えると納得いかなかったけれど、それでもどういふわけでそうなったのか知りたくて、僕はただ、先生の口から出る次の言葉を待っていた。

ぴゅうう、と12月の冷たい風が僕らの頬を駆け抜けた。先生のサラサラな髪の毛が風に靡いていく。僕はその様子をただ無感動で見つめていた。伏目がちだった先生の目がゆっくりと上を向き、僕を捉えた。

彼の瞳には、僕が映っていた。

「・・・4年前、ここで一つの殺人事件が起こったんだ。結論的には痴情の纏れ。犯人は女で、別れた元恋人が許せなくて、コースタートリックを使って殺した。・・・親友で、彼の今の恋人の女に濡れ衣を着せて」

そういえばそうだった。

まだ小学1年生だったあのころ。担架に運ばれていくそのビニールのかけられた物を僕は遠巻きから眺めていた。あれが『人の死体』だと聞いてかなり吃驚した覚えがある。

あの死体は首がないんだよ、と。

「俺らも同じコースターに被害者と一緒に乗っていたんだ。そしてそこに怪しい奴らが実はいた。頭から下まですっぽり黒い服で身を纏ってた2人組。凍てつくような瞳めをして。・・・ぎらぎら光ってた。

・・・探偵の勘つつうやつでね、何かあるんじゃないかって。そんなときからずっと思ってた。・・・そして、事件が解決したあと俺はヤツらを偶然見かけ・・・また、追っかけた」

何でそこで追いかけるんだ、そう思ったあとで、僕はすぐに思い直す。

彼ならそうするはずだ、と。・・・そして『江戸川コナン』である彼も。

いや、もし同じ状況に偶然かち合えば、あの頃の僕らだったらきっとそうしていたはずだ。いつもそうやって僕は事件に遭遇し、解決してきたじゃないか。勿論、彼がいなければ決して解決できないことであつたはずだということは十分承知しているけれど。そして、『少年探偵団』という活動を休止している今じゃ、そんな事件を探して走り回るなんてことはしなくなったけれど。

「・・・そう、そういう無駄な好奇心のために彼は・・・『工藤新一』は暫く姿を消し、代わりに貴方の知る『江戸川コナン』が現れたの」

灰原さんの言う『無駄な』という一言に、一瞬不愉快そうな顔をしたが、僕が未だ理解不能という表情をしているのを見て、小さく溜息をついた。

「そいつらの取引現場を目撃した俺は、その証拠写真を撮るのに夢中になっている間に別の黒づくめの男に捕まり、とんでもない薬を飲まされたんだ。毒薬が検出されない薬。．．．そしてその結果、俺は．．．『工藤新一』の体は、幼児化した」

「『ヨウジカ』．．．?」

勿論、すぐ頭の中でその言葉はすぐに変換された。けれども、人間の体がそう伸び縮みできるものなのか、僕はどうしてもできなくて。

「そう、幼児化。．．．つまりそこで小学1年生の体、．．．『江戸川コナン』の体が出来上がったのよ」

隣で、灰原さんが先生の代わりに答えた。

彼の秘密を自分のことのように話す灰原さん。

一体どれほどまで彼の秘密を知っているんだろう。次々沸く疑問は拭うことは出来ないまま、僕は一言も口に出せないまま、暫く2人を見つめていた。

「．．．そこで俺は事情を知った博士と話し合って毛利探偵の家に居候することに決めた。．．．何も判らない組織の情報を少しでも多く掴むために。．．．最初はあるまいうまくいかなかったけどな。．．．徐々にいろんな仕事が無い込んできて、俺は、組織を倒すことができた。一人の力じゃなかったけど。．．．いろんな人の力を借りて。そして俺は．．．工藤新一に戻る事ができた。」

「私の作った解毒剤だね」

「おい、灰原．．．」

慌てたように先生が彼女を睨んだ。おまえは喋るな、そう目が語っていたように僕は感じた。

灰原さんの思惑通りなのか、僕の頭に次々と浮かんでくる疑惑。なぜ、『江戸川コナンになった新一先生』が、『小学生の灰原哀』さんに解毒剤を作ってもらったのか。

そもそも目の前の灰原さんは何者なのか。

まさか、まさか・・・。

僕の疑惑に、灰原さんはくすり、と笑った。

「そう、私も薬を飲んで小さくなったの。・・・そして、その劇薬を作った当時19歳の科学者という名を借りた犯罪人。そしてそれを飲んで何十人も死なせてしまった・・・一人の殺人犯」

「はいばっ・・・」

「・・・謎を抱えたミステリアスな女の子の真実なんて、蓋を開けてみればこんなものよ。」

その言葉を聞いたとき、僕の意識はシャットダウンされた。

この粉雪の色のように、真っ白に目の前の色が染まっていく。

ああ、これが夢ならば早く覚めて欲しい。

次に目覚めるときはまた小学1年生だったあの頃に戻っているだろうか。

5人で無邪気に遊んでいたあの楽しかった頃に。

10（後書き）

・・・久しぶりですっ＞＜更新ようやくできました！！

文章変わってるかもですゞ（；´Д｀●）ノあわわ

1巻を読みながら作りました。

新ちゃんと哀ちゃんの独白と、みっちゃんの相槌と（笑）。

1巻、18巻の粗筋みたいな感じなので（笑）。だって『全てを話を聞いた』なんて感じに纏めることができなかったんだもの！。

つまらない！なんて感想は・・・ごめんなさいい＞＜

がんばりますので、次回もよろしくお願いします！

雨と老女もがんばります！それではここまでお読みいただきまして、ありがとうございます！

信じられなかった。

コナンくんが新一先生で、灰原さんが現在23歳の女性。しかも人を殺す薬を作った殺人犯・・・？

そんなはずがない。

きつとこれが夢なんだ。夢であるはずなんだ。

遠のく意識の中で僕はずっと祈っていた。

これが夢であってほしい。そして僕が体験していたことは長い夢だったと思いたかった。

コナンくんが消えたあのときも、全て。

僕らはまだ小学1年生で、誰も消えることがないんだ。誰も、何処にもいかないんだ。

コナンくんが消えることもなく、こんなに心を痛めることもなく。二人の大人びた会話に嫉妬して、詮索ばかりしている、そんなことをしているはずなんだ。

だから、お願い。

早く、夢から・・・覚めて。

★★★

「みっちゃん、何やってるの、起きなよー！！遅刻しちゃうよー！」

はつきりとした誰かの声が頭の中で聞こえた気がして、僕は目を覚ました。

ドンドン、とドアの音。気がつけばベッドの上で。・・・見慣れた天井。そして、聞きなれた声・・・。

ここは、自宅だ。そして、僕を起すのは、多分姉の声。久しく聞いていないような気がした。でも多分、これは姉だとはつきりわかった。体を起こし、ふと手や足を見る。・・・一回りも二回りも小

さいような気がする。・・・何でかわからないが。

まだピカピカのランドセルが机の上に置いてあり、今日着ていく着替えもそこに準備されてある。・・・けど、このランドセルも、どうも新しすぎるような気がする。

・・・僕は小学”2”年生のはずなのに。どうしてこんなに違和感があるのだろう。どうしてこんなに・・・。

「みっちゃん、何やってんの、もうすぐ終業式でしょ、早く行かないきゃ」

「あ、はい・・・」

ドアが開き、すでに制服を着た姉が覗き込む。遅刻魔である姉にしては珍しい。・・・それとも僕自身が遅すぎるのか。

「早いですね」

「うん、今日は当直でねー。早く行かなきゃ相方に怒られるのよね。・・・ああ、もう時間ない！」

「・・・朝美さん、そのお言葉」

「あ、はい、すみませんでした。お母様っ」

階段の下に母がいるのか、少し機嫌を悪くしたその声が遠くから聞こえてくる。相変わらず言葉遣いに厳しい母。そしてイマドキの姉。どうしても二人の間に不一致が見られるようで。そんな二人のやりとりに思わず苦笑する。

「じゃ、そゆことで。先行くからね。あんたも早く着替えなよ？」

軽くウインクをして見せて、再びドアを閉めた姉の残像を暫く頭の中に残りながらも、僕はパジャマの上着のボタンを一つ、二つとはずしていったのだった。

その日は冷たい雪が降っていた。粉雪がちらちら降る12月の終業式。

僕は黒い傘を差して学校に向かう。いくら遅刻魔の元太くんでも、この時間帯では遅すぎる。きつと10分、15分前には学校に向かっていることだろう。

どうしてかうまくいかない。

頭が働かない。

こういう風に見る景色も、どこか違うような気がして。こんなに世界は広がったのだろうか。

木はこんなに高かったのだろうか。

この看板は、こんなに大きかったのだろうか。

ジョンは、こんなに大きかったのだろうか。

見るもの見るもの全てが違うような気がして、僕は小さく溜息をついた。

一体どうなっているんだ。

きつと夢見が悪かったせいで頭がボケているんだ。

長い夢を見すぎていた所為だ。だから。

「おはよ、光彦」

その声に、僕は一瞬ドキンとして振り返った。

その声は毎日聞いているはずだった。昨日だって、一昨日だって聞いていたはずだった。

だけど、どうしてか、この声を待ち望んでいて、そして少し怖かった。

振り返れば、彼、コナンくんが立っていて。

「オメー、なんでこんな時間帯にいるんだよ、もうまるっきり遅刻だぜ？」

にやっと笑う彼の表情。

その表情に、僕はなんだか胸がいっぱいになって。

なぜだか、男泣きした。自分でもわからないのに、涙がこれでもかというほどあふれ出て、自分には止めることができなくて。

おいおい声に出して泣く僕の姿に、彼はホントに戸惑ったような顔をして、僕をただただ見つめていた。

粉雪はそんな僕らの頭の上にくくつもいくつも降り注いでいた。

11（後書き）

はい！また前回『倒れネタ』やってしまいました＞＜

雨と老女、HANABI、またあした・・・

全て倒れネタです。そしてこんかいも！！！！
もー、飽きないでください。逃げないでください。

もう、自称ちゅー作家改め、自称『貧血、失神作家』こつぶにしようと思います。以下お見知りおきを。

・・・20分で作っちゃった（笑）。いつ更新できるかわからないしね・・・＞＜

ホントにここまでお読みいただき、ありがとうございます！！！！次回もよろしく願います！

その日の朝は最悪だった。

夢見は悪いわ、寝坊はするわ、朝から変な気持ちを抱えているわ。挙句、今度は昨日も一緒に一日を過ごしたはずの彼、江戸川コナンくんを見て思わず胸がいっぱいになっておいおいと人目を憚らず泣くあたり。

僕はとうとう如何にかなってしまったのかもしれない。

「なっ、何泣いてんだよ、光彦？」

彼と目が合ったとたん、道路の真ん中で鼻を吸りながら咽び泣く僕に、コナンくんは心底戸惑っているように見えた。

「変なモンでも食ったか？」

「違いますよお、元太くんじゃあるまいし」

この気持ちを抑えようと必死になりながら、でもどうしようもなくて。涙をしゃくり上げながら涙目になって彼を見あげた。

「そーなんだけどさ。じゃあ何でそんなに泣くのかわからなかったからさ。・・・腹でも壊したのかと思って」

頭をぼりぼりと掻きながら、首を捻るコナンくんに対して僕は何も答えられずにいた。自分自身なぜ彼を見て声に出して泣き始めたのかさえわからなかったからだ。

時刻は8時20分。登園時間は8時00分までとなっているから、

すでに20分の遅刻だ。

コナンくんはギリギリになることはあるけれど、僕と同じで遅刻なんて珍しい。いつもギリギリまで寝ているそうだが、必ずその時間帯には居候先の蘭さんが送り出してくれるからだ。彼女がいないときも外出先からモーニングコールをしてくれるらしく、遅刻なんて絶対ありえなかったのに。

「今日は蘭さん、合宿とかだったんですか？」

「え？」

僕の問いに、彼は一瞬戸惑った顔をした。

「・・・うん、・・・まあ」

奥歯にモノが挟んだような物言いをして、彼は一瞬視線を泳がせた。こうなった時の彼のことはもうわかっていた。

・・・彼は何か隠している。そして。

とても嫌な予感がした。体の中をかけ巡るような嫌な予感。

空を見上げれば粉雪が僕らの頬を掠め、そして溶けていった。

「・・・あとで、話がある。ガッコ終わったらいつもの教室な？」

「話・・・？」

なんだろう、その言葉はとても嫌な言葉で。

僕はこの誘いを断ってしまいたい衝動に駆られた。逃げ出したい衝動に駆られた。

だけど、それと同時に逃げてはだめだという警告の言葉も確かに聞こえていて。

「・・・大丈夫。別に心配することじゃねーよ」

「・・・嘘」

思っても見ない言葉が僕の口から飛び出した。自分で自分のその発言に思わず信じられないという気持ちでいっぱいになっていて。でも、確かに僕は彼の言葉を否定した。彼もそんな僕にぎよっとした顔で見つめている。

「・・・嘘、じゃねーよ」

「じゃあ今言ってください、ここで」

「・・・え？」

「別に勿体ぶらなくたって、それほどたいしたことでもない話題であれば、今ここで言えるはずでしょう？」

どうしてここまでムキになるのか、自分でもわからなかった。

ただ、彼に嘘をついてほしくなくて。

・・・というより、なんで彼の言葉が『嘘』であると確信しているのか、事実それもわからなかったけれど。

「・・・オメー・・・どうしたんだ？さっきから」

「知らないですよ。・・・知らないけど、・・・何か嫌な予感がするんです。今日何か嫌なことが・・・あんまり味わいたくない出来事が起こるような・・・。そんな気がするんです」

直感――。

ただ、それだけのことなんだろうか。目の前の彼は、僕の言葉にただ小さく「そっか」と呟いた。そして顎を小さく指先でなぞり、それからほんの少し溜息をついたのだった。

「その予感、もしかしたらあたっちまうかもな。・・・」
「ごめんな？」

泣き出しそうな表情を一瞬だけして、彼はそう呟いた。その言葉に、僕は少しだけ満足した。嫌な予感がホンモノだと認めるのは辛かったけど。

「いえ・・・。・・・じゃあそれまでに覚悟決めときますね。何を君に言われても動じないように」

力を抜いていると、きつと泣いてしまうから。

何を言われるかわからないけど、きつと自分にとって辛いことだとどこかで理解^{わか}っていたから。僕はそう力強く言い切った。そんな僕の様子に、彼は驚いたように僕の顔をぼかんと見つめていたが、僅かに頬を緩ませる。それから、「・・・いこっか」と僕に背を向けた。

「・・・はい」

僕の言葉に、止まっていたコナンくんの足取りが再び動き出す。僕は少しでも自分を奮い立たせるように唇をぎゅと噛み締め、それから、彼の後に静かに続いたのだった。

★★★

学校に向かう時に味わう、僕と彼、二人だけの時間。

こんなツーショット、そういえばこの2年間、あまりなかったはずなのに。

どうしてか長い時間この雰囲気慣れていったような気がして。いわゆる既視感ということなのか。何度も首を傾げる僕に、彼は不思議そうな顔をした。

「どうした？まだ何かあんのか？」

「いや・・・。ただ、何か変なんです、朝から」

「・・・？」

それは、今日味わうその『嫌な予感』の予兆なのかもしれないけど、でも、それにしても。

「デジャブーって言うんでしょうか。いや、それだけじゃなくて・・・こんなに僕のランドセルは大きかっただろうか、こんなに僕の

手は小さかっただろうか。・・・そもそも僕は『ホントに』小学2年生なんだろうか、と」

その言葉に、コナンくんは一瞬驚きの表情を見せた。

「な、何言ってるんだよ、そんなことあるはずないだろ？俺たちじやあるま・・・」

そう言った後で彼は余計なことを言ったと思ったのか、慌てて言葉を濁した。その言葉に僕は一瞬反応して、言葉を返そうと思ったが、「寝ぼけてるんだよ、まだ。・・・ほら、早く行くぞ！」と彼の手が僕の手首をぎゅっと引っ張り、僕の体はがくん、と揺らされて、その行為は止められた。彼は、明らかに動揺していた。

そんな彼の横顔を、僕は暫く見つめていた。

『俺たちじゃあるまいし』

彼の言葉が頭の中で、大きく1回だけ、その言葉は響いていった。

★★★

学校に着いたのは終業式が始まる直前で。教室で待っていた小林先生に迎えられ、僕らは急いで廊下に並び始めた友達の後ろに並んだ。小林先生は何一つ怒らず優しく迎えてくれる。どうやら母親からの連絡はすでに来ていたらしく。ほっと一息ついた。

「何やってたんだよ、光彦ー！」

背の順なので、一番後ろの方に並んでいた元太くんが遠くから怒

ったような声を上げる。心配したんだぞ、と。

「光彦くんが遅いなんて珍しいね」

僕の隣で同じように並ぶ歩美ちゃんに、僕は決まり悪そうに笑みを作った。

「それにコナンくんも」

歩美ちゃんが、まだ教室に残って小林先生と話している彼にそつと視線をやった。小林先生は、コナンくんに向けて、何か心配そうに話している。僕らはこっそり耳を敬てた。

『今日の遅刻の理由、何かあったの？』

『何にもないよ。蘭ねーちゃんに聞かなかった？』

『・・・聞いたわよ、家族で寝坊した、って』

その理由に、僕と歩美ちゃんは顔をあわせ、珍しいこともあるもんだ、というような表情をした。歩美ちゃんなんておかしそうに笑いを堪^{こら}えている。

『・・・でも、電話口で蘭さんの声、泣いてるように見えたから』

『やだなあ、泣いてなんかいないよ』

くすり、と笑った彼の声。

蘭ねーちゃん、欠伸でも堪えたいんじゃないの、と。でも、それでも小林先生にはごまかせないようだった。

『嘘、だって声だってあんなに震えて……。だから……。もしかしたら毛利さんと蘭さんが喧嘩か何かしたんじゃないかって……。それ』

『違うよ、それについては何でもないから』

『それについては、って……。ちよっと江戸川くん？』

聞いてはいけないことを聞いてしまったような気がした。

歩美ちゃんは表情を曇らせ、うつむいてしまう。コナンくんがすぐその場所から出てくることはしなかったから、僕らは、『何も耳にしなかった』という表情に戻すのは難しいことではなかったはずだけど。やっぱりどこか気まずい雰囲気僕らの中に立ち込めた。

蘭さんは、ちゃんとそこにいて、けれど遅刻をせざるを得なかった理由。

一体どんな理由なんだろうか。

あの空き教室で話してくれることがそれなのだろうか。

けれど、僕はもうすでにその理由を知っているような、そんな気がして。

廊下の窓から見える灰色の雲からは、いつの間にか雪片一片も降りることもなくなったが、また降りだすのは時間の問題で。

枯れ葉を旋風が踊らせるその様子を、僕はぼんやり見つめていた。

12（後書き）

はい！前回に引き続き、気がつけば小学2年生になったみっちゃん！

コレは夢か、それとも・・・。

ああああ、雨と老女の話と同じになっちゃうよー。

でも、この展開、多分次回で終わります（笑）

最終回はあと3，4回後の予定でいます。多分。行き当たりばったりなのでわかりませんが。

最後までお付き合いお願いします。

あっ！ビバ、名探偵コナン『紺碧の棺』！！！！

誰かシークレット行った人いないかなー。いいなー。

ネットで、3，4人ほど見かけました。みんな憧れのサイト様。涎を飲みつつ昨日はクレヨン新ちゃん見てました（笑）。舞台挨拶見てる人、いいなー。

終業式の最中、僕は彼に何があったのか考えていた。

『……でも、電話口で蘭さんの声、泣いてるように見えたから』
頭の中で今も聞こえる小林先生の声。僕は生徒から離れたところに他のクラス担任と一緒に起立した先生の横顔、そして、前の方に体操座りで他の友達と座っている彼の後姿をちらちらと見つめていた。

「……落ち着きないわね、どうしたの？」
「え……？」

振り返れば、いつのまにきたのだろう、僕の肩越しに、灰原さんが座っていた。女子列の最後尾。大体並ぶ列は背の順であり、背が低い方ではないが、とりわけ高い方ではない彼女は、僕が見る限り女子列の真ん中あたりにいつも並んでいるはずなのに。きっと遅刻して並べなかったのだろう。そう頭の中ですぐさま理解させた。

「いつの間に来たんですか？」
「今よ」

別に急いでいたり、焦った様子も少しも見られない灰原さんに、僕は思わず苦笑する。

「珍しいですね、寝坊でもしたんですか？」

「……ええ。ちょっとね……」

「そうですか……」

小さく笑って、彼女は視線を前方に移し、ぽつり呟く。

「来てるわね……」

「……」

大体誰のことを言っているのか、わかってはいた。案の定、目線

の先には、コナンくんがいた。僕は暫く二人のことで考えてから、静かに尋ねる。

「・・・彼のことで何か知ってるんですか？」

「え？」

「僕が落ち着かないように見えたのは、今朝の小林先生とコナンくんのやり取りを聞いてしまったからです」

暫しの沈黙の後、灰原さんがゆっくりと口を開いた。

「そう、なんて？」

「遅刻したコナンくんは、小林先生は心配そうに聞きました。『何かあったの？』って。『電話口で遅刻を伝える蘭さんは泣いてたように見えたから』って。・・・なんだかそれが気がかりで。・・・欠伸とか、ケンカとか。たいしたことのないことならいいんですけど・・・何か怖くて」

そう。怖いんだ。

僕の中にあるこの感情は恐怖なんだ、と今更のように感じる。

何か嫌な予感が頭の中で渦巻いていて、抜けなくて。

どうすればいいかわからなくなる。

「今日、コナンくんと呼ばれてるんです。いつもの教室にって・・・でも、僕、あまり行きたくないんです。・・・でも、やっぱり行かなくちゃいけないような気がするんです。何がなんでも彼の話を聞かなくちゃいけないような・・・」

「・・・」

灰原さんは、黙って僕の瞳を見つめていた。

「・・・ねえ、灰原さん」

僕は聞いた。

「彼、何処にも、行きませんか???」

一瞬、ほんの一瞬だけ、彼女の瞳孔がきゅっと小さく縮まったのを、僕は見逃すことはできなかった。

それは、誰かに聞いたかった質問。

何故か僕はそれについて確信めいたものを感じていたわけだけど。

「……さあ、どうかしらね」

次に僕に視線を向けたとき、彼女は口元をぎこちなく緩ませた。

それは、いつもの『灰原さん』であるように、一見見えたけれども、その前に彼女が、見せた見えない『YES』は払拭することができずにいて。

予想はしていた。答えは見えていた。

だけど、その予想が、予感が、答えが、全て不正当であることを僕は望んでいたのに。

何も変わらない、その『肯定』のポーズが見えたとき、僕は心の底から落胆した。

★★★

その後、滞りなく終業式が終わり、通知表が配られ、2学期最後の『さようなら』を言うと、僕らは2年B組の教室を後にする。しかし僕はクラスメートが次々と教室を出て行く中、一人暫く席に座って、ただぼんやりと通知表を眺めていた。いうなれば、動けずにいたのだけでも。

「ほら、何してんだよー。コナンから集合かかってるじゃねーか、ほらっ、行くぞー!!」

ぽんっと力強く背を叩かれ、僕はその振動と、痛みによって我に返ると、元太くんが相変わrazuの威勢のよい声で、僕の机の前に覆

いかぶさるようにして立っていた。

「何なんだろうなー、別に何か用があったら別に帰りでもいいのによ？ クラスも離れているわけじゃねえし。それとも少年探偵団についでに重大な発表かもな？ 新メンバーとか。・・・って、団長の俺を差し置いて、黙ってコナンが決めるわけねえか・・・」

いつの間に自分を『団長』にしている元太くん。普段なら突っ込むところだけど、今はそれどころじゃなくて、僕は暫しだんまりを決め込んだ。そんな僕に構わず、クラスを出て、空き教室に向かう廊下を歩きながら、元太くんはいつものようにいろんな話をする。

彼は何も知らない。きつと、歩美ちゃんもまだ。

知ってるのは僕と、灰原さんと、そしてコナンくん自身。

どうして彼女だけが誰よりも先に知っていたのか。今はそんなことは問題ではなく。彼が本当に最初から最後まで話してくれるかということに頭があつて。

いつもならば何で灰原さんがコナンくんがいなくなることを知っているのか、どうして何も話してくれないのか、なんて思うことだつてあるはずなのに。彼女が動揺したのではないか、辛くて泣いてしまったこともあったのではないか、そう思うことだつてあるはずなのに。何故かそのときは少しも感じることなく。

何故そう感じてしまうのか、それさえも全て知っている気さえした。・・・ただ、忘れていただけそう思ってしまう自分に、不思議な感覚を覚える。

朝から続くデジャヴはここでも体感してしまう。

探偵団のミーティングルームとして小林先生がこっそり提供してくれた空き教室。彼はポケットからカギを取り出して、教室に入り込む。

「なんだ、一番乗りじゃんっ」

一人一人カギを持っていて、入る際に自分のカギで開けるというシステムにしたため、部屋に入ってからではないと誰がいるかわからない。誰一人いなかったその教室を嬉しそうにぐるりと見渡すと、彼は大きな声で言った。その小熊のようなもっこりとした後姿を、僕は黙って見つめていた。

彼が奥へ進むと、彼の太った体で隠していたため見えなかった視界が開かれて、正面にあるガラス窓からちらちら再び粉雪が降っているのが見えた。

「今日は朝から雪ばっかだなあ。・・・でも少しも積もっていやしねえ」

ぶつぶつ呟きながら、彼は窓の方へ歩み寄り、暫く黙って校庭を見つめていた。

それは、1分も満たない時間だったかもしれない。30秒くらいだったのかもしれない。

ただ、その間、確かに静寂な時間は保たれていた。

かち、かち、かち、と秒針を進ませる音がやけに響いている室内。廊下から聞こえる足音。

目を閉じれば、何故だか次に来る順番も何処となく頭に浮かんできて。『覚えて』いて。

歩美ちゃん、灰原さん、と僕の予想通りの順番で、そして思った通りの表情でやってくるから、僕は溜息をついた。・・・それはたまたまかもしれないけど。

胸をつくような嫌な予感。

どく、どく、どく、と心臓が波打って。眩暈に似た何かを感じながら、僕は強く胸を押さえた。そして、そこで僕は気づいてしまう。

・・・というより、思い出してしまう。

僕が今、本当は何才であるか。そして、この日は何の日であるか。どうして灰原さんが彼がいなくなることを知っていたのか。このときになってようやく。

そう。

朝からの違和感は気のせいでも何でもなかった。

僕は、

僕は小学2年生ではなく。

『小学6年生』の、円谷光彦だった。

「・・・大丈夫？」

灰原さんが静かに尋ねた。隣で歩美ちゃんも心配そうに僕の顔を覗き込む。そして、元太くんも。僕は、「ええ」と大きく頷いた。

この場所にいれば。

目を閉じれば微かに見えるビジョン。

これから何が起るのか、これから誰が何を言うのか。
予感が『現実』^{ほんとう}だと確信してから次々と見えるモノ。

きっと、あと1分もすれば。

僕はそつと時計を見上げた。11時25分。そろそろ彼がやってくるころだ。

30秒・・・

20秒・・・

15秒・・・

10

9

8

7

6

5

4

3

2

1・・・

カチャリ、とカギが開く音。そしてガラリと扉の開く音。それから「悪い。遅くなっちゃった」と、悪びれた様子の彼。そんな彼の姿に、僕は唇をぎゅっと噛み締めた。

もし、変えられるのならば、あの日のトラウマを変えるのは、ここに
いる自分しかいなかった。

この時間を生きる、『小学2年生』の、円谷光彦しか、・・・い
なかった。

13（後書き）

うーん、この話で回想というか不思議編（笑）は終わりそうだったんだけどな。

とりあえずがんばります！

久しぶりに書いたけど、難しかったです。でも最後までがんばります。

あと4話くらいの感じで進むと思います。最後までお付き合いをお願いします。

本当に、本当にありがとうございました！

・・・ていうかあたしミステリチックな話、好きだよなあ・・・。

「悪い、遅くなっちゃった」

部屋を入ってくると、彼は頭を掻きながら居心地の悪そうに、空いている何脚かの椅子を見つけ、そこに腰を下ろした。

「なあに？コナンくん。改まって。何か探偵団に仕事入ってきた？
・・それとも」

歩美ちゃんがいつもの可愛らしい表情を見せながらも、コナンくんの表情を窺うように、彼を斜め45度の角度で上目遣いに見上げた。

「もつとコナンくんにとって、私たちにとって大切なこと？」

「・・・え？」

真っ黒い瞳が、彼を捉える。とっても真剣な瞳で、コナンくんを見つめていた。きっと彼女も何か感じる場所があるのかもしれない。あの二人のやり取りに、あの子の僕と同じように、何か感じていたのだろうか。

その言葉にぎょっとしたのか、コナンくんは目を大きくするとちらり灰原さんに目を遣る。『何も言っていないわよ』そう彼女の目が答えているかのように見えた。

あのときはこんなことに気づくこともなかったけど。というより、こんな話の展開になっていたかさえ、定かではなかった。ただ、わかってるのは、この場所で、『このとき』彼は僕らに『別離^{わかれ}』の言葉を告げたということだけ。

小学2年生の体を持つ、『未来』に住む僕は、このことを何もかも知っていて、そして『変えたかった』。これが例えあのころのトラウマから生まれたひとつの夢であったとしても。

「・・・ああ」

彼が歩美ちゃんの言葉を受けて頷く。目の前で不安げな様子で彼を見つめるその視線が痛々しい。

『あの時』の僕は何も知らず、ただ、彼が言う言葉を待っていた。何も知らない、目の前にいる元太くんと同じように、普段とは違うこの雰囲気戸惑っていた。

「なんだよ・・・『大切』なことって・・・まあ隠し事かよ、ほら、さっさと話し終えてメシにしようぜ？」

「ごめん元太、光彦、歩美・・・灰原・・・俺、1月に転校する」

間髪いれずに、被せるようにコナンさんの口からその言葉が出された。言い出しにくそうに、視線は誰とも合わせることないまま。「っ！！！！」

誰かが一瞬だけ息を呑む音が聞こえた。それは、歩美ちゃんだったような気がする。一瞬の高い声と、ひゅっと喉から吸い込むその音と。

ああ、この言葉を、二度も彼の口で、その声として聴くことになるなんて。

「・・・はあ？何だ、その冗談。・・・ぜんっぜんつまんねーぞ？」

その張り詰めた空気をほんのひと時だけ壊してくれたのは不愉快そうに顔を顰めたのは元太くん。

「ほら、そんなくだらねーこと言ってねーで、早く本題言えよ？俺、ハラへってんだからたいしたことない用だったらホントぶっ倒すからな！」

「元太くん・・・」

僕は思わず彼の服の裾をぎゅっと引っ張った。

「・・・ナンだよ？」

意図が掴めない、というように、元太くんが首を傾げて僕を見る。彼の言っていることが本当であるということ伝えようと、僕が口を窄めたとき、横から搾り出すような、震えた声が、彼女の口からその言葉が漏れた。

「・・・どうして？」

その言葉を呟いたのは、・・・歩美ちゃんだった。

「蘭おねーさんと探偵事務所のおじさんとケンカでもしたの?・・・悪いこととして、追い出されちゃったの?」

今にも泣き出しそうで、大きな瞳から涙が溢れてて。そんな彼女の小さい背中を、隣で灰原さんが優しく撫でている。僕はそんな彼女の姿を見てられず、さっと下を向いた。

胸がきりきりする。

思い出したくなかったことが、僕の心傷トラウマとなっていたこのことが、現実として、僕の目の前で繰り返されている。

どうして僕はこんな夢など見たのだろう。

当然のことながら頭の中で見るそれよりも、今の光景は自分にとって過酷なもの。

トラウマを克服せよ、と誰かが指令を出している。自分の力でこの状況を乗り越えろ、そう誰かが指令を出している。

理解わかっている。理解わかっているけれど。

・・・けど、今の僕には痛すぎる。

なぜならば、この後起きる全てを知っているから。

そしてさらに、彼らの秘密を中途半端に知っているから、僕の傷

はさらに深く抉っていく。

――でも、今このまま夢から覚めても、僕は新一先生に向けて「ああ、よかった」と、笑顔を向けられるか？ 灰原さんの顔を見られるか？

きっと夢から覚めても同じこと。だったら、傷は早いうちに直したほうがいい。

新一先生の口からじゃなく、『コナン』くんの口から聞きたい。灰原さんの秘密も。『小学6年生』を生きる彼女じゃなくて、今、この時代を生きる彼女の口から。

そうしたら、きっと僕のこの何とも言えないこの胸の傷も治るかもしれない。そう思ったときに、彼の声が聞こえた。

「マジ・・・かよ」

・・・元太くんだ。

「・・・つとに、マジ、なのか？ おまえ、ホントに・・・！ 行っちゃうのかよ！」

このままならない雰囲気、さすがに彼も気づいたようだ。信じられないという表情で。

「・・・ああ」

喉から出した彼の声は、少し掠れていた。その言葉に、元太くんは大きく項垂れた。

少し自分の記憶が曖昧だったり、そうだと思っていたことが変わっていたところもあるが、修羅場はこの後もまだまだ続く。そう自分ではわかっていた。歩美ちゃんがコナンくんの胸を掴んで泣きじやくったり、元太くんのパンチが飛んだり。

もう、見ていられない。だから、僕は。

自分にGOサインを出した。

彼がその言葉を口にするより先に。

「・・・アメ」

「アメリカに行くんですね。・・・探偵事務所に預けていたお父さんとお母さんが、一時帰国して、君を連れて行きたいと言った。それを君から朝聞かされた蘭さんが、その淋しさに思わず泣いた・・・ただそれだけのことですよ」

彼が言い出す前に、僕が言った。

「アメリカ！？そんな遠いところ・・・」

思わず甲高い声を上げる歩美ちゃんの横で、案の定、コナンくん、そして灰原さんはぎょっとして僕を見つめていた。

「・・・光彦、おまえ、何で・・・」

「・・・もう、トラウマになる原因を、再現したくないからです」

歩美ちゃんの涙を見たくない。

辛そうに下を見てうつむく彼を見たくない。

「え？」

訝しげに僕を見つめるコナン君に対して、僕はさらに言葉が続ける。

「そして、元太くんにも、歩美ちゃんにも。・・・ここからトラウマを作って欲しくない」

「トラウマって・・・」

「コナンくんは気づいてないかもしれないけど、僕たち繊細なんですよ？君の存在はとても大きい物なんです。大切な仲間なんです」

否、もしかして気づいていたかもしれない。それとも、言ってしまっただけから、『元』に戻ってから気づいてしまったのかもしれない。

だから、彼は『新一先生』として、この4年間僕をサポートしてきた。仕事が忙しい筈なのに、学業も恋愛も彼の前に沢山のものが残っているはずなのに、彼は僕らのことを見つめてきた。

でも、僕らの傷は癒えなかった。

新一先生がいても、『コナンくん』がいないから。

『コナンくん』の代わりにはなれない。

だって、『コナンくん』は、『新一先生』じゃないから。

いくら似ていても本人じゃないから。

そう信じて疑わなかったというのに。

だから。

・・・だから。

「けど、本当は、そうじゃないんです。歩美ちゃんも、元太くんもがっかりする必要もない。・・・彼はアメリカなんかじゃない。ずっとここにいます」

僕は言った。驚いたような表情で、灰原さんとコナンくんは顔を見合わせているのを、僕は目の端で感じていた。

「・・・コナンくんは、僕らの傍にいる。だって、彼は・・・」

そう、姿を変えてもずっと傍に。
だって、彼は。
彼の本当の姿は。

「高校生探偵 工藤新一なんですから」

14 (後書き)

ふー。ようやく！ようやくですよ！不思議編が終わりになります。
あと1話。

・・・だから今回で終わりにしようとして、終われなかったのー！
！（逆ギレこつぶ・苦笑）

それが終わったら、再び現実世界に。
残り少ないですが、最後まで全力疾走したいと思います。此処まで
お読みいただき、ありがとうございます！！！！

粉雪降る窓を正面に見据えて、僕はこの言葉を口にした。

少年探偵団と小林先生だけが許される、あのころの僕らの秘密基地。『あのとき』、何も知らなかった僕たちに、彼はアメリカへ行くということを告げた。

でも、真実はそうじゃない。

「・・・コナンくんは、僕らの傍にいる。だって、彼は・・・・・・・・」

僕はそこで大きく息を吸った。

「高校生探偵 工藤新一なんですから」

★★★

あれから2時間が経って、僕は彼らと別れ、帰宅し、机に向かっていた。あのころ好きだったマンガ本なんて手に取ってみたり、ラジオをつけてみたりして。

辺りは道路がうっすら白くなっていて。気温がまた下がったのだと僕は認識した。

結局、――結論だけ先に言えば、この世界では彼はこの場所で、少年探偵団のみんなに『工藤新一』だということを告げた。それは殆ど、僕が彼に言わせたようなものだけだ。

工藤新一が組織に薬を飲まされてそれによって体が幼児化して『江戸川コナン』として帝丹小学校にやってきた。そして密かに組織を探り、とうとう組織を沢山の仲間と共に壊滅まで追い込んだ、ということ。その事実を全て話せば、最初は信じられないというような表情で元太ちゃんと歩美ちゃんは顔を見合わせていたものだけれど、最後には元太くんは困惑した表情を見せながらも、「まあ、いつでも会えるってことだし・・・しゃあねーか。許してやるよ」と言い、歩美ちゃんは涙ぐみながらも「じゃあ、コナンくんは一足先に大人になっちゃうんだね・・・ずるいなあ」と言って笑って見せた。決して『戻る』とか、『コナンくんじゃなくなる』なんて言わずに。健気に無理して笑顔なんて作って。・・・こういうところが僕が彼女を今でも好きな理由なんだよなあ、なんて思ったりもする。

結局灰原さんの秘密や、組織が具体的にはどんなことをしたかとか、そういう詳しい話は一切触れることはなかった。もし、また灰原さんが何か言い出しそうなことになったら、コナンくんより先に僕が止めることになっていただろうけど。またしても彼女たちに新

たな『トラウマ』を作ってもらいたくなかったから。

それとも、彼女ならば、と。

歩美ちゃんならばまた僕たちが考え付かないことを言っておぼろけさせることもできるのではないか、なんて考えたけれど、結局は灰原さんが言い出すこともなかったし、勿論コナンくんも言い出す気配もなく、終わった。

今にして思う。

もし、これが現実世界ならば、小学2年生だったあの時、この再現されている『夢』であるのと同じように、彼がこうして自身の秘密を話してくれたならば。

僕らは、こんなに苦しむこともなかった。

そして、もし、これが現実世界でなくとも、小学6年生になったあの時、この再現されている『夢』であるのと同じように彼女がこうして自身の秘密を黙っていてくれたならば。

僕は、こんなに苦しむことはなかった。

ああ。なんでこれが、『現実』ではないのだろう。

僕は切にそう思っていた。

机に突っ伏し、堪えきれず涙が溢れ出てくるものを袖で拭う。

僕が克服しなくちゃならないトラウマはまだ山ほどあって。

結局のところ、どれ一つ解決できてなくて。

彼が……。新一先生じゃなくて、コナンくんの口から全てを話してくれれば、全てトラウマだった気持ちも薄くなると信じていた。

……。でも、そうじゃなかった。何も解決しなかった。この『夢』の中の、元太くんや歩美ちゃんの傷は作ることにはなかったにしても、トラウマを抱えた僕の心は、何も変わることもできずにいた。

今の僕は、ただ『夢』の中でじたばたしているだけのような気が

して。

掻き回しているだけのような気がして。
希望通りの光景を客観的に見て満足しているだけのような気がして。

僕が今していることは、云わばただの体感バーチャルゲームじゃないかって。

一体僕は何がしたいんだ？

何のためにここに來てるんだ？

トラウマを克服したいんじゃないのか？

……僕は、何をすればいいんだろう。
どうしたら、この苦しみを失くせるんだろう。
どうすれば……。

p p i p i p i p i p i p i p i p i p i p i p i
i p i p i p i p i p i

ポケットの中から聞こえてくる懐かしい音。

僕はその懐かしい音にすぐに我に返ると、それを手にした。
探偵バツジだ。そして、相手は。

「……もしもし、こちらみつひ……」

「よお……。今から出てきてくれないか？」

落ち着いた、少し思いつめた彼の声に、僕はこくり、と唾を飲み込んだ。

★★★

阿笠邸。

家主である彼は今日も友人の発明品の新作発表会か何かに呼ばれているらしく、不在のようで。そこにいるのは、その家の居候で、彼に娘同然に可愛がられてる彼女と、彼の知人の息子で、この家をよく行き来する彼。

あの時……。時間でいうと現実世界の『昨日』と同じように（場所も姿も違うけれど）、二人が僕を迎えてくれて。3人で顔をつき合わせて話すことなんて、コナンくんのおきも、『新一先生』のおきもあれが最初だった。だから、今回が『2回目』となるわけだけれども。前回同様、いやそれ以上に空気は重く感じる。

「悪いな、わざわざ呼び出しちまって。メシ、食ったか？」
「……。はい」

緊張のためか、少し上ずった声になりながらも、僕は頷いた。わかっていた。これから彼と何を話すかくらい。きつと訊きたいのだろう。

何故、僕がその『事実』を知っていたのか。そして、どこまで知っているのか。

――一体僕は何モノなのか。

答えなくちゃいけない。

いや、答えたい、と思った。

たとえこれが夢だとしても、彼は『彼』だから。

性格が捻じ曲げられているわけでもなく、彼は現実と同じようにここに存在しているから。

本当にタイムスリップしているのかと思うくらい、ほんもの現実に忠実に。

だから彼に聞いてもらいたかった。

僕が今までどう思っていたか、そして今その事実を知ってどう思っているか。

この『時代』の彼なんてきつと何もしらなかっただろうから。全部聞いてもらいたい。そして考えてもらいたい。

たとえ、これが夢だとしても。

「あのさ、・・・さっきのことなんだけどさ・・・」
いいにくそうに彼が言った。

「どうして、俺が『工藤新一』だなんて、わかったんだ?？」
僕は緊張で、引きつる口元を押さえてこう言った。

「・・・だって。・・・僕は貴方自身の口から聞いたんです。貴方が教えてくれなかったら、僕は何もわからなかった」

一瞬ぽかんとした表情の二人。が、暫くして、灰原さんがはあ、と大きな溜息をついた。

「・・・ほーら。こんなことだろうと思ったわよ。・・・『自業自得』じゃない。・・・まあ私は最初からこの子たちに何も話さないで姿を消そうとする貴方の考えには賛成できなかったけど」

呆れ、責めるような口調で、表情の彼女に項垂れる彼。けれど、

僕は大きく首を横に振る。

「違うんです、灰原さん。・・・僕はここにいる『彼』に聞いたわけじゃない。『工藤新一さん』に聞いたんだ。彼は何かも教えてくれましたよ、あなたが何者かも。そして、過去何をしてきた人も」

「!!!!」

「おい、光彦、おまえ・・・っ!」

慄くような表情の彼、そして彼女。愕いて、コナンくんは僕の腕をぎゅっと掴んだ。そして、動揺しているキモチを抑えるかのよう
に、一瞬彼は下を向いて、それから無理に笑顔を作っていた。彼の口元が引きつっていた。

「カマかけてる、んだよね? お前は何も、知らないんだよね? ・・・ただ、知りたいだけなんだよね? ? 俺の寝言か何かを聞いて。全てを確かめたくて、そんなことを。あのとき、俺はお前のカマに乗せられただけなん・・・」

「・・・いえ、知ってますよ。あなたのことは大体」

言わなければならなかった。

聞いてほしかった。

ここからの僕のことを変えて欲しかった。彼の言葉で。

祈っていた。信じていた。

彼の言葉で何もかも僕の気持ちを変えられることを。

トラウマを変えられることを。

「僕は、今から4年後の現実世界で、あなた・・・工藤新一さんになったあなたに言われたんです。『俺は工藤新一だ』って。そして、灰原さんのままでいるキミにも」

僕のことを目を間開いたまま見つめている灰原さん。僕は最後の

言葉を彼女に向けた。

「4年後？現実世界？さっきから、お前一体何言って……。それに、そっちが現実だったらこっちは何だって言うんだよ」

愕いた表情で、彼は僕を責めたてる。

「なあ、おい。冗談にしちゃあつまんね……」

「なるほど？私たちはあなたの作り出された世界というわけね。……フフ面白いじゃない」

「面白いって、灰原、テメー……」

クールに笑う灰原さんの姿勢に慌てるコナンくんを見ながら、僕は話を続けた。

「夢、だと思います。あなたに……。作り出された世界、というより現実そのもの。僕が体験したアノ頃のこと、脳に焼きついていて。それを夢として再現された」

「夢？」

「そうです。今から4年後の、工藤新一さんと灰原さんが僕に告げたその事実、ショックで僕が意識を失い、そこで見た夢。ホントは何も知らない小学1年生に戻りたかったわけだけど、戻ることができず。奇しくも僕がトラウマの原因を作ったこの時代にキオクが溯って、……。僕はあの頃の二の舞にならないように懸命に事実を変えようとした。それが現実の世界に反映されるわけではないけれど」

でも、変えたかった。

変えて、早く楽になりたかった。

全てを知りたかった。

暫くの沈黙の後で。ようやく口火を切ったのは彼だった。

「……まあ、さ……」

戸惑いを隠せずにいるらしい、ぽりぽりと顎を人差し指で掻きながら、僕に視線を合わせようとしないまま、一瞬躊躇いがちにもご

もごと口を動かせた後、彼はこう言った。

「俺が生きているこの世界が夢だなんて俺は信じないし、信じたくもねーけど……。でもお前が本当に苦しんでいるのはわかるから……。聞いてやるよ、話してみな。お前が今までどんなに苦しんできたか。ま、それが俺のせいで、灰原のせいで、なんて今は思わないし。話によってはこれから思わねえことぐらいは、覚悟しとけよ？」

「……はい」

僕はほっとして、思わず顔を綻ばせた。

コナンくんが口にしたその言葉は落ち着いて考えれば、めちゃくちゃな話だといわれるかもしれないけど、今の僕にはその言葉は希望の言葉であって。

それは心から笑った、僕にとって本当に久しぶりの笑顔だった。

15（後書き）

お久しぶりですー＞＜

今回は長いです。いつもより500文字から1000文字くらいは長いかな。切れるところが切れなくて！。

ああ、今回も終わらなかったよう＞＜

今回の展開は、雨と老女に通じるところがありまして（ご存知の通りですが）雨と老女もいつか最終話近辺をアップするときには（行くのか！？）こんな最終回にならないよう、極力避けてがんばりますー！

あっちは志保ちゃんの気持ちを優先して、内容もかなり変えようと思います。・・・その展開までは全然行ってないけど。

今回は不思議編を終われるようになんとかがんばります！もう終わればいいな的なカンジなので、終わらなかったら、笑ってやってください。

ここまでお読みいただきまして、ありがとうございました！

16 (前書き)

7月15日1時半現在、追記修正あります。
後書きに詳細を書いています。本当に申し訳ありませんでした。

「聞いてやるよ、話してみな。お前が今までどんなに苦しんできたか。ま、それが俺のせいで、灰原のせいで、なんて今は思わないし。話によってはこれから思わねえことぐらいは、覚悟しとけよ?」

その声は自分にとってとても心地よく、温かった。もうほとんど話していたから、そこで終わりにするつもりはなかったけれど、自分を信じてくれるとは思わなかったのでも嬉しかったのだ。僕は全てを話した。全てが終わったあの日から、未来はどう変わったか。僕らはどこまで苦しめて。そして挙句、小学6年生になった『今』、新一になった彼に何を告げられたか。なぜ自分はここにたどり着いてしまったのか。夢の中にいるまだ小学生の彼と彼女にこの全てを。

僕の、僕らの苦しみを、トラウマを、全て彼にぶつけていた。

★★★

「……………そう」

僕が全てを話している間、2人は終始眉間に皺を寄せて俯いていた。

が、それが終わると一瞬だけ沈黙が走り、その後に口火を切ったのは思いもかけず、灰原さんだった。

「ごめんなさいね。少し言葉が過ぎたのかもしれないわ」

「え?」

聞き返すと、彼女は小さく溜息をつく。

「私、何をしたかったのかしら。今の貴方じゃいざ知らずそのときの貴方はきつとさらに気が動転していたでしょうに」

「……………」

「『江戸川コナン』の消息のことについて、何も知らないで受験前に苦しんでいる情緒不安定な貴方にした、私たちの選択は間違っていないかったのかもしれない。・・・けど、私のことまでそのとき話すことではなかった。・・・そのときのあなたには負担が大きすぎた。私の、私たちの全てを話すには、もう、時が遅すぎたのかもしれない」

そう。

何も知らなかった自分に詰め込まれるように、押し込まれるように入れられた情報は、もう処理できない状況にあって。

予測できない現実には、僕の頭は、ショートした。

「けどさ」

コナンくんが言葉を挟む。

「それでも『オメー』は、光彦に伝えたかったんだろ？自分の秘密を隠して話すことは、できなかったんだろ？・・・そこまできつとこいつは苦しんで。・・・見てられなかったんだろ？」

「・・・わからないわ、そんなこと。・・・未来の私がどう思ってたことなんて。ただ、彼に言ったことは確かな事実。それは否定することはできないでしょ？」

「・・・じゃあ自分自身の言葉を信じてやれよ。後先考えずに言うやつじゃねーだろ、オメーは。・・・光彦。オメーだってそう思うだろ？灰原がオメーを苦しませる目的で言ったことじゃないって」
「っ・・・ハイ」

僕は思わず目を見張った。彼の瞳はずっと柔らかく、優しい眼差しで灰原さんを見つめていた。

そう、そうなんだ。

僕の心に一瞬にして光が僕の前に広がった。

こういう風に2人はいつでも分かり合っていて。

ジェラシーばかり固まっていたけれど、僕はそんな2人が好きだった。

だから敵対関係にいるなんて。被害者加害者の位置にいるなんて、思えなかったし、思いたくもなかった。

目の前の2人は確かに通じ合っていて、信頼しあっていて。

かつてのそんな関係なんて微塵も連想されなくて。信じ難かったけれど。

けど、たとえその事実があったとしても、それでも目の前の今の彼らは演技じゃないことは確かで。彼女が僕らにしていたこと一つ一つが演技じゃなかったことは確かで。そんなに僕の目は甘くはないから。

今の彼は彼で。そして彼女は彼女だ。

工藤新一先生になっても、『コナンくん』は『コナンくん』で。

そして『宮野志保』という人間になったとしても、・・・そのときの、僕らと過ごしたキオクがあるかぎり、『灰原さん』は『灰原さん』なんだ。過去、何があったとしても。彼女は今を生きてるんだ。

彼の言葉に険しかった、切なそうに歪んでいた彼女の表情は彼の言葉に、少しでも楽になったような気がした。ああ、やっぱり彼には適わない。僕は心からそう思った。

暫しの沈黙。

そうして僕が彼女に視線を向けたとたん、彼女はぽつりと呟いた。

「・・・話の続き、知りたい？」

「・・・いえ。その続きは、夢から覚めた後に『本人』の口から。今度はちゃんと聞けると思うんです。あのときはもう情報が多すぎ

てパニックになってしまったけど。トラウマはもうおかげさまで消えているんです。現実を変えられるわけではないけど、疑似体験としてもあの日に帰ることができたから。ここで貴方たちと出会うことができたから。あのときと違う結果を見ることができたから。・・・そういうトラウマがなくなった今、もう僕は彼女の全てを受け止める覚悟はできていますから」

「・・・そう」

ほんと安堵したように灰原さんが柔らかな笑みを浮かべる。

「もう、トラウマはなくなったのね」

「はい」

僕ははっきりと言った。

「ありがとな・・・光彦？」

「え？」

後ろで両腕を組み、黙って僕たちの話を聞いていたコナンくんが突如こう言った。

「オメーのおかげであいつらを傷つけずに済んだ。俺らもあとで後悔することもなくなった」

「いえ、僕は・・・」

僕は思わず首を振る。

「私たちに果たして『あと』が存在するのかわからないけどね」

「・・・おい」

クスリと灰原さんが意味深に笑った。笑えない状況なのに。ジト目でコナン君が灰原さんを睨む。僕は思わずぷつと噴き出した。

「・・・そう、そうやって、『ここでの』全ては終わった。」

ここに意味もなくなった。満足感が僕の中を駆け抜ける。

どうせならばここにいてもいいんじゃないかとも思えるけど。夢の中にい続けてもいいんじゃないかとも思えるけど。・・・そんなわけにはいかないわけで。

もうそろそろ別れを告げなくてはならないと思っていた。

そう、そんなとき。

ふっと意識が薄らいでいく感覚を覚えた。ふらり、眩暈を感じる。突然シャットダウンされたあの時とは少し様子が違うけど、けれどももう『その時期だ』と解っていた。『さよなら』をいえるチャンスを作ってくれたのかもしれない。夢だというのに、なんだか急に泣けてくる。

「・・・どうした？目に何かゴミでも」

心配したコナンくんが僕を気遣ってくれる。いえ、と僕は答えた。

「・・・もう、時間がないみたいです」

「時間で・・・。もう行くのかよ？」

慌てたように彼が声を上げた。

「は・・・い」

意識が遠のいていく。

さよならがいえない。このままじゃ。

いや、さよならだけなくて。本当に言いたかったのは。

全てを知った今、君に伝えなかったのは。

「円谷く・・・？」

「・・・・・・・・・灰原さん。もし、もし君が望んでいるなら」

夢だとしても、もし彼らに未来がなかったとしても。

そこにいる彼女に伝えなくてはならないことがあった。聞いてもらいたいことがあった。

「はい、ばらさん・・・」

「何・・・？」

僕は遠のく意識に心の中で治まれ、治まれと念じながら、彼女の許へ、1歩2歩と歩み寄った。きょんととして僕を見つめる彼女の細い腕を取ってこう呟く。

「失礼ながら、・・・話したいことがあるんです。あなたの耳、貸してくださいませんか？」

そうして僕は耳打ちして・・・。

完全に意識が遮断された。意識の向こうで、彼女がとても驚いたようなそんな気がした。

★★★

「・・・みつひこ・・・。みつひこ・・・光彦」

聞きなれた低い声が頭上から聞こえ、僕は頭痛を感じながらもそっと目を開けた。

まだ朦朧としていたが、自分は『戻ってきた』ということを確認した。

声をかけてくれたのは、新一先生であって。彼の隣には小学6年生の。あのころより背も高くなり、胸も少し膨らんで、大人びた表情の灰原さんが心配そうに自分を見下ろしていた。

「大丈夫？」

「・・・は、い」

僕はそんな彼女にいとおいさを感じながら、口元を緩ませた。

ふとあたりを見渡せば、ここがあまり見慣れない場所だということに気がついて。

僕の部屋じゃない。博士の・・・。彼女の家でもない。けれど、車の中でも、救護室でもなく。とつても立派な部屋。・・・病室でもない。ここは。

「ホテルですか？」

「・・・や、俺の部屋だ」

「へっ?! 先生の・・・っ!?!」

思わず上半身をがばっと起して、それから拍子に咳き込んだ。慌てて灰原さんが、大丈夫? と背をさすってくれる。・・・そうやってくれることが、なんだかすごく、こそばゆい。

彼の部屋というその部屋は、一流ホテルのように立派で。さすが世界屈指の推理小説化と、日本の元人気女優の一人息子だ、なんて思わず感じてしまっただけ。いや、しかしほとんどの全神経は彼女の薄くて、しかし柔らかくて温かいその手の感触に集中してしまっていたけれど。

「・・・ごめんなさいね、私のせいで」

僕の背を擦り続けながら、夢の中の彼女と同じように灰原さんはそう言って目を落とした。

「いえ、大丈夫です。おかげで、僕のトラウマはほぼ解けましたから」

「え？」

きよとん、として灰原さんが僕を見上げる。そして隣にいる新一先生も、怪訝そうに僕を見下ろした。

「あとはあなたの真実を全て聞くことです。もう倒れたりしませんから。・・・躊躇わずに、僕に全てを話してくださいませんか？」

僕の目はとても真剣で。そんな瞳に先生もそして灰原さんも驚きを隠せないでいたようだけれど、僕の瞳の奥がホンモノだと気づいたようで。彼女はふんわり微笑み、ゆっくりと口を開き、再び自身のことを話し始めた。

さつきまでは。

夢を見るまではこんなに穏やかな気持ちでいられなかったのに。もう何があっても大丈夫だってわかっていたから。僕は全てを知る覚悟を備えて、彼女の瞳を見つめ直した。

窓から見る粉雪は今も尚降り続く。

あれから何時間経ったかshれないが、窓の向こうの遠く見える道路は白一色に染まっていて、僕の心を静かに癒してくれた。

16 (後書き)

時期がまるっきり違います。久しぶりに続きを書きました！やっと思議世界から脱出！

次回かその次で最終話になると思います。

最後まであと少しですが、引き続きよろしくお願いいたします。

ここまでお読みいただきまして、ありがとうございました！

追記。

7月15日1時半現在。

最初の方でみったんに自分の全てを話したことを詫びる哀ちゃんのシーン周辺、大幅加筆修正しました。

申し訳ありませんでした。

12月の空に粉雪が吹き乱れる。彼女が僕に告げた過去。

彼女の出生から始まって。

彼女の名前は宮野志保という本来ならば現在23歳だということ。両親は組織の研究員だったこと。とても重い任務を任されていたこと。

生まれてすぐに名前もよくわからない『組織』と呼ばれるその場所に連れられて託児所のような場所で預けられていたらしいこと。そこでは『sherry^{シェリー}』と呼ばれていたこと。物心ついたときには既に両親が亡くなっていたこと。5つになったとき米国に留学させられ、言葉もわからないところに放り出されて十年滞在したこと。昼は学校に行き、夜は遊ぶこともなく研究室に半ば監禁されるような形で医療・化学の知識を植えつけられたこと。そうして飛び級を繰り返し、17で博士号を取って日本に帰ってきたこと。日本ではすぐに死んだ親の研究を引き継ぐ任務を半ば無理やり任されたこと。作った薬は「APT X4869」。元は別の用途で作るためのものだったはずのものだったが、その試作品を勝手に奪われて、殺人の道具にされたこと。

悪徳代議士、弁護士、大学病院の理事長……。朝目覚めればテレビで彼らの死を知って。彼らがその前後に見せる気配、そしてその症状に、自分の試作品が使われていることを知った。どんなに責め立てても、

「殺しているんじゃない、実験をしているんだ。マウスなんかを使うより人間を使うことで、おまえの協力をしてやってるんだ」と鼻で笑って相手にしてくれなかった。歯向かえば、たった一人の姉を殺す、と脅されたこと。

なのに、早く完成させるように、これ以上自分の薬で死人が現れないように、手持ちの薬がなくなり、また新たにA P T X 4 8 6 9を奪いにやってきたそのとき。・・・もうその薬が、完成品ではなくても僅か1パーセントでも何か命の崩壊させる成分が残っていないように、作っていたのに。

彼女に届いたのは。

組織に殺された姉の報せ。

たった一人の大好きだった姉の死。

何度も組織から抜け出さそうと頑張っていた、優しかった姉の死。

そう、それが組織と決別を決めた決定的なこと。どうして姉を殺したのか、その理由を何度も問い詰める彼女に、組織は何も話してはくれず。そうしてその正式な回答を得られるために取った対抗手段が薬の研究を中断すること。それに怒った組織が研究所のある個室に拘束した。手錠をかけ、動けないようにして。

たった一人の家族さえも組織によって失った彼女は、上が彼女の処分を決定するまで待たされるはめになって。どうせ死ぬならと、とあるクスリを飲んだ。それが彼女の作っていた・・・まだ研究の滞っていたA P T X 4 8 6 9の試作品だった。

なのに。

「・・・なのに、死ななかった。・・・私は生きた。・・・けれど、体は別のものになっていた」

ベッドに横になったままの僕を、灰原さんは見下ろして、そうして白い雪の降る窓に目を向けてぽつり、と呟いた。

「・・・それが、幼児化・・・」

「そう」

こくり、彼女が頷いた。

「苦しくて、苦しくて。体がばらばらになるような苦しみで、これで死ぬると思った。・・・けど、気がつけば天国でもなく地獄でもなくて。・・・私は死ぬなかった。・・・代わりに、6、7歳の体になっていたの。今思えばまだ死んではだめだと姉が言っていたのかもしれないわね。・・・けどその時はもう何も考えられなくて。どうすればこの状況を脱することができるかと思ったわ。・・・・死ねなかったら、逃げるしかない、と。もうあそこで組織に使われることはしたくなかった。・・・だから裏切ったの。小さくなつた体である場所から逃げることは容易いことだったわ。・・・体はフラフラだったけれどね」

「そして、そうやって逃げてきた場所が・・・」

「博士の家の前だった。本当は工藤くんの家に行くはずだったのだけれどね、途中で力尽きたの」

「え・・・っ」

ここで彼の名前が出てくるとは思わなかった。

何故、彼のことをそのときに出てくるのだ？彼に助けてもらって組織を倒すために？

そのとき彼はもう『江戸川コナン』だったのか、そうして、そのことを灰原さんは知っていたのだろうか。知っていたとしたら辻褄が合わなくなるはずだ。

一瞬だけ、隣で話を聞いている新一先生を見上げた。

「データだね。・・・知ってたのよ。彼がAPT X4869の試作品をジンたちによって飲まされたこと。けれども死なずに幼児化されたこと」

「データ？」

「ええ。・・・あの薬を飲んだとされる被験者の中で、彼だけ死亡確認されてなかったから。・・・2度ほど調査員を派遣して」

「そんな・・・」

自分の知らないところでそんなことが彼の周りで動いていたなんて。

そうして、そこに彼女が大きく関わっていたなんて。

「1度目は何も収穫が得られず、埃だらけで誰も住んでいる形跡は感じられなかった。そしてその1ヶ月後、2度目の調査で、その変化に気づいてしまったのよ。・・・たった一つの変化。それは」

「それは？」

「なくなっていたのよ。・・・洋服ダンスの中の、子供の服が。1ヶ月前にはごっそり入っていたはずの子供のころの服がね。・・・そこで気づいたの。APTX4869を投与された彼は死んだんではなく、幼児化されたんじゃないか、ってね。動物実験のときに一匹だけ死なずに幼児化されたマウスがいたから容易に立てられた仮説だけど・・・。だから・・・彼のところへ無我夢中で走っていたの。雨の中、苦しくて、気が遠くなりそうな気持ちを抱えながらね」

「だけど・・・どうして、灰原さん・・・。新一先生ところに行こうとしたのですか？」

「そうね・・・」

「同じ状況に陥った俺なら、おまえのことを理解してくれると思うたから、だろ？・・・そんな言われてもわかるわきゃねーつつうの」

その声に視線をずらせば、思い出して怒っている様子の彼がいた。

「あら、そんな勝手なこと言ったかしら」

「言ったよ。・・・ホントにどうしてやろうか、って思ったくらいオメーのことが憎かった」

「あら、怖い」

灰原さんがそう言ってオーバーに肩を竦めてみせる。むっとしたような表情で新一先生は彼女を睨んだ。そんな表情に、灰原さんは

小さく「ごめんなさい」と言った。

「・・・あの時ね、その言葉しか思いつかなかったのよ。そう思ったことは事実だし、あなたがどれほど優れた人かもわからなかった。ただ、貴方に聞きたかった。姉はどういう風に死んだのか。最期に何を言ったのか・・・」

「灰原・・・」

「・・・え、どういう」

「そういう、ことかよ」

振り返れば、新一先生は辛そうに溜息をついて、くしゃり、と彼女の赤茶けたふわふわの髪を撫でた。

「江戸川コナンになってまもなく・・・俺は明美さんの、・・・灰原の姉の死んだ事件に関わっていたんだよ。・・・彼女が死んだその時も、俺は彼女の傍で。・・・新聞にも載っていただろ」

「あ・・・」

思い出した。何年も前の話。小学1年生のとき、確かあの有名な10億円強奪事件の凶悪犯人が実は女で、警察が来る前に銃で自殺したと大々的に報道された時があつて。その新聞に彼が一番前に載っていたということ。

あのときはまだ彼と仲よくしていなかったから、新聞に出ていても野次馬で行ったのだろうとぐらいしか思っていなかったあの事件。

「当たり前だろ。組織から逃げてきた女なんて、信じられるわけねーだろ・・・。だから、あのときはまだ・・・。こんなに長い付き合いになるとは思わなかったけどな」

苦笑いを浮かべつつも、彼はちらりと灰原さんに目をやる。その目は江戸川コナンくんが彼女に向けるあの眼差しと何も変ることがなく。そういうことだったんだ、と僕はふっと口元を綻ばせた。

「けれども、今では・・・いや、コナンくんだったときも、あなたと灰原さんはいつでも信頼しあっているように見えました。僕の知

らないところで、いろいろあったんですね。そうやって信頼しあっていたんですね」

やっと謎が解けた。何故2人がミステリアスな会話を続けていたか、その理由も。そしてその秘密を僕らに打ち明けられないその理由も。

「そうね、・・・信頼しあってるかはわからないけれど。・・・少なくとも彼なら、組織を・・・、姉を殺した、父母を事故に追い込んだ、私の人生をめっちゃめっちゃにしたあの組織を倒してくれる思ったわ。・・・そうして彼は、やってくれた。・・・組織を、倒してくれた」

「俺一人じゃきつと何もできなかったけどな・・・。悔しいけど」
ふっと彼が笑った。

「灰原さんのおかげで、ですか？」

「え・・・？」

驚いたように灰原さんが僕の方に目を向けた。本当に裏もない純粹な質問だったのだけれど、そんな顔をされたらむず痒くなってしまう。一瞬目を丸くした先生も、小さく「ああ」と呟いた。

「そうだな・・・だけど、おまえたちのおかげでもあるんだぜ？」

「え？」

一瞬僕は耳を疑った。僕は『組織』を追い詰めることは何もしてない。

「江戸川コナンになって出会った人たちのおかげで、灰原やジョディさんや赤井さん、ジェームズさん。服部、白馬。確かにあの場で戦ったのは確かにこの人たちだったけれども、日常だって随分支えになってたんだぜ？少年探偵団でいろんな事件に行ったりきたり。猫を追ったり、探し物を見つけたり。つまらねえ授業を受けてたり。蘭のご飯を食べたり、どっか行ったり、おっちゃんのいびきを聞いたり、迷推理を聞いたり。工藤新一の時は得られないものを沢山得

ることできた。沢山の人の力があつたから、俺は組織に行き着き、追い詰めることができたんだ。生きて帰りたいって・・・あいつらが待っているあそこに戻りたいって思ったんだ」

『ありがとな』

彼が言った言葉に、僕はぶわあぁと体が熱くなって。涙が急に零れてきた。彼はやっぱり工藤新一だけれども、江戸川コナンくんだった。新一先生がずっと僕たちの傍にいた理由も。探偵の仕事よりも塾のバイトの方を頑張ってくれたことも。

そして、灰原さんも宮野志保とかシェリーとかそういう名前じゃなくて、灰原さんは灰原さんだった。彼女の過去が何があつたとしても、やっぱり灰原さんだったと思った。

彼の言葉を聞いて、僕は確信したんだ。

あの『夢』は『夢』であって『夢』じゃない。彼は『彼』で、彼女は『彼女』だった。理想が作り出したものじゃなかった。

だから、今、目の前の。新一先生と灰原さんを見て、僕は確信できたんだ。それは。

あのととき、・・・『夢』の中で、小学6年生の彼女に僕が最後に言ったあの言葉は、間違いじゃなかったということ。

『

・・・それが、あなたの希望ならば。

』

僕たちは、大丈夫だから、と。

17 (後書き)

2ヶ月ぶりです。こつぶです。お久しぶりですー！ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

すみません、ほぼ原作ネタ書き連ねてるだけで＞＜。がっかりさせていたらごめんなさい。でもこれを省くわけにはいかなかったのです。

多分あと2話くらいだと。最後まで突っ走ります！
本当にありがとうございました！

18 (前書き)

＜修正＞2008年12月6日、『新一の家』が、いつのまにか『病室』設定に作者ミスで変わっていたので、修正しました。申し訳ありませんでした。

一体今は何時ぐらいになっているのだろう。

目が覚めたときがいつで、彼女から話を聞いたのがいつだったか。それすらもわからなかった。けれど夜はもうとっぷり更けている。それだけはわかっていた。

いつしか先生は部屋にあったソファですやすやと眠りはじめている。それを見て僕は穏やかな気持ちで口元を綻ばせた。

「不思議ね・・・」

「え・・・？」

ベッドの上、僕の足元の方に腰掛けて、灰原さんはふんわりと言った。

「貴方を見ると、まるで別人みたい。気絶したときと、目を覚めた後と。・・・一体どんな夢を見たのかしら？」

「過去に、・・・過去に、戻ったんです。・・・小学2年生の、あの日に。そしてコナンくんたちに逢ったんです」

「え？」

驚いたように灰原さんは僕を見た。それはそうだろう。誰だっと思うものだ。けれど、彼女はそこで笑ったりすることはなかった。ただ、驚いたような表情で僕を見つめている。

「僕がさっき先生のことを聞いたことをそのまま何も隠さず暴露するから、コナンくんすごく慌ててましたよ。夢なのにとてもリアルで・・・」

現実にあったような気持ちさえた。

「そう・・・不思議な体験をしたのね。・・・その時のこと、もう少し聞かせてくれない？」

「もちろん」

僕はゆっくりと話し始めた。



どれくらい経っただろう。最後まで灰原さんは笑うことなく、僕の夢の体験を聞いてくれた。多分20分か30分の出来事。でも実際はもしかしたらもっと長いかもしれないし、短いかもしれない。部屋に時計がないのはやっぱり不便だ。携帯電話もどこに置いたのかわからないし。

「そう、あなたは過去に行ったのね」

灰原さんはしつとりとした声で僕の顔をちらり見て、そうして笑った。

「ただの夢だから。・・・現実に反映されることはなかったですけどね・・・」

僕が苦笑いして言うと、

「・・・・・・それでも、確実に貴方は変わったわ」

灰原さんはそう言って腰掛けていたベッドから立ち上がる。

「ちょっと、安心した」

歩き出した細くて華奢な背中。僕の大好きな彼女の背中。

「もう、こうして話すことはないのかもしれないと思ったから。・・・もうこの関係は終わったと思ったから。・・・安心したのよ、目が覚めて貴方が穏やかな表情を向けられたから。・・・嬉しかった」
震える背中。

「受け入れてくれたことが、嬉しかった」

「当然ですよ。・・・だって、灰原さんは灰原さんですから。灰原さんになる前、宮野志保さんだったとしても、シェリーだったとしても。それでも君は君なんです。・・・そうして、きつとこれから

も。・・・どんなに姿は変わっても、君は君だってこと、僕は教えられたんです」

「え？・・・何、どういうこと」

話が少しずれているということに気づき、わけがわからないというような表情でそっと灰原さんが振り返った。

「貴方に頼みがあるんです。・・・もし、貴方が望むなら。・・・本来の姿、宮野志保さんに、戻ってください。・・・『灰原』さんがそこにいなくても僕は、・・・いいえ、僕らは大丈夫ですから」

驚いたように一瞬目を見開いて、灰原さんは僕を見た。

「何、どういうこと？何夢の中で言われたの？戻りたいなんて私、一言でも言った？」

「言ってません。言ってませんけど。・・・わかるんですよ、何となく。・・・僕らのことが心配で、戻れないんでしょう？小学2年生のとき、2人で転校するわけには、いかなかったんでしょう？戻るに戻れなかったんでしょう？」

「ちが・・・違うわ。私は」

彼女らしからぬ表情で。狼狽したように灰原さんは少々声を上ずらせていた。

凶星だ、僕はそう確信する。

あのとき、夢の中で同じ言葉を言ったときも彼女はすごく吃驚した表情をした。現実も、やっぱりそうだった。

「コナンくんには・・・。工藤さんには蘭さんがいたから戻らないわけにはいかなかった。というか、戻りたくて仕方なかったんじゃないですか」

「そうよ、そのために解毒剤を作る研究を進めてたんだから。・・・あの人は、迎えてくれる人がいた。・・・けれど、私には『宮野志保』になった私を知る人は組織以外いなかった。博士も、この姿で

出会った人だし。血縁でもない若い女と男が一緒にいるものじゃないわ。だから私は飲まなかった。ただそれだけのことよ」

「だったら家を出ればよかったじゃないですか。あなたのそのご両親の遺産は残っていたんじゃないですか？」

「新しい家を探すのがめんどくさかったのよ。それに、博士の栄養管理だってしなきゃならないでしょ」

「・・・わかりました。じゃあ僕らじゃなくて博士が理由で」

「違うってば」

彼女が強く遮った。言ってから、自分自身の声に驚いたらしく、それからほっとして振り返る。・・・大丈夫だ、先生は寝ている。ほっと安心したように溜息を深くつくと、彼女はぼつり、呟いた。

「誰が理由でもないわ。・・・戻りたくなかっただけ。宮野志保になる意味がなかっただけ。貴方が言ったとおり、彼にはあった。それが私と彼の運命を変えた決定的なこと」

「意味がないなんて、決め付けてるのは灰原さんなんじゃないですか？」

「・・・え？」

「僕は思うんですよ。・・・自分を偽り続けるのは」

「私は、偽ってないわ。・・・灰原哀は私そのものよ」

怒った表情で灰原さんが僕をキッと睨みすぎる。そんな表情で彼女に見つめられることがはじめてで、思わずためらってしまうのだけれども。

「でも、本来の姿は宮野志保だ、灰原哀じゃない。・・・あなたのこの姿がホンモノに変わることはないんです」

「あら・・・。心外ね、じゃあこの体はニセモノだっていうの？あなたにとって、現在いまいる灰原わたし哀はハリボテ人形に過ぎないってわけ」

「違います！違いますけど・・・」

彼女にとって厳しすぎることだとはわかっていた。若しかしたらへんなことを言っているのかもしれないとはわかっていた。・・・

けど。

「10も違う体を持って、違和感ありませんでしたか？僕はありました。・・・それは夢の中だったのに」

小学2年生の体を持った小学6年生。頭が思うのと現実では随分違って。最初は自分が『小学6年生』なのだと覚えているはずがなかったのに。なのに、やっぱりどこかしっくりいかなくて。

「あなたも、そうなんじゃないんですか？」

「・・・そんなの、もう慣れたわ」

さらに、灰原さんが言った。

「それにね、戻るわけにはいかなかった。あの姿でいれば組織に場所が知られたとき、障害がまた出てくるしね。この姿の方が楽なのよ」

「・・・またそんな屁理屈言って」

僕は心底呆れて溜息が出た。まったく彼女はホントに素直じゃないんだから、と。

「屁理屈って」

ぎょっとした顔で灰原さんが僕の顔を見返した。僕がそんなことを言うとは思わなかったらしい。

「また成長すれば元の『宮野志保』さんの顔に戻ってしまうというの？日に日に僕らは大人になっていくんですよ？貴方の顔を見れば、歳をとったって、若返ったって、『宮野志保』さんに関係する人だってことくらいわかりますよ」

「でも・・・」

それでも何か言おうとする彼女に、僕は目を瞑って思わず嘆息した。それから、息を吸って、ぴっと人差し指を彼女の鼻先に向ける。「ねえ、灰原さん。・・・あなたは、いつまでトラウマから逃げているつもりなんですか？」

「・・・えっ・・・？」

驚いた顔で彼女は僕をまじまじと見た。

「本当にその姿でいいんですか？もう誰も同じ状況下にいない、自分より10も下の友達と、つまらない授業を受けて、他愛もない話をして」

「何言ってるの、楽しくないと思ったの？私は十分楽しんでみんなと2度目のスクールライフを楽しんでいるわ」

「苦痛じゃないですか？『彼がいない』んですよ？あなたのことをわかってくれる人がそこにいないんですよ？」

そう、その生活圏の中では誰も・・・。

「だって貴方たちがいるじゃない。それに悩みを相談したかったら、隣に住んでるんだし相談くらい」

「だったら宮野志保でもいいじゃないですか。逆でいいじゃないですか。本来の23歳の姿で生きてくれればそれでいいじゃないですか。新一先生だってきつと思うているはずですよ」

「そうでしょうね、でも彼は」

「強く言えないんでしょう？自分は戻ってしまったから。僕らにウソについて戻ってしまったから。だから貴方に強く言えないんだ」

まったく、先生も先生なんだから、と少しだけむかむかしてくる。ソファに寝ている彼を横目でちらりと見れば、背中を向けて相変わらず眠っていて。

これが元太くんや園子さんのような性格ならば、小突いてやることは出来ただろうけど。

「本当はね、僕だってあなたと一緒にいたかった。ずっとずっと過ごしたかった。同じように授業を受けて、卒業して。一緒に同じ時を過ごしたかった・・・。なんて、僕が合格して別の中学に行ったらその生活は終わってしまうことだけれど・・・。それでも確信してたんです。どんな土地へいっても、どんな状況になっても僕たちの絆は変わらないって。だから、僕は決意した。自分の夢を実現させるために」

「夢？」

「そう。僕はいつかコナンくんを超えてやるんだ、ってね。いっぱいいっぱい勉強して。・・・あなたや歩美ちゃんを振り向かせてやる、ってね。コナンくんの謎も解けましたが。・・・それでもやっぱり燃える気持ちは変わりませんよ。今は新一先生以上の人になるっていう野望に変わりましたが・・・」

「そう・・・」

灰原さんは少しだけ口元をほころばせる。そんな彼女を見ながら僕は言葉を続けた。

「だからね。・・・僕は思うんです。僕が遠くへ行っても、どんなに離れていてもこの絆は変わらない、僕は僕のままだと思えるように。目の前の新一先生が、結局はコナンくんのままだったと同じように。貴方の中に『宮野志保』さんが残っていたと同じように。いくら姿が変わっても、貴方は貴方だと思っんです。僕らの絆は何も変わらないんですよ、だから、寂しいことなんてないんです・・・」

涙が出そうになって。あわてて喉をこくりと鳴らせた。出そうになった涙を無理やり押させこんだ音。ここは、笑うところだ。彼女を、安心させるところなんだ。

だから、僕は無理やり笑った。

そんな僕を、彼女はぼんやりと見て、それからふっと視線をそらせた。

ぽつり、つぶやくその言葉。

「・・・貴方は誤解してるわ。今の私の気持ちを」

「え」

「確かに、私は・・・あのころは、あなたの言った通りの気持ちでいたこともあったわ。でも・・・今の私は、そんな風には思わ

ない。逆に、このままでよかった、って思ってる」

「どうして、ですか？」

僕の言葉に、彼女はふふっと小さく笑って、口元をきゅっと結ばせたまま、細い指先を僕に向けた。

「僕？」

「……そう、正確に言えば、あなた、『たち』ね。私はこの4年間を……ううん、『彼』がいるころだから5年ね。この5年、こうして『小学生』としてあなたたちと過ごした時間。とっても貴重だったわ。私が『宮野志保』だったときなんてこんな経験したことなかったから。クラスと一緒に芋ほりに行ったり、動物園に行ったり、写生をしたり、料理をしたり。去年はクラス全員で1泊2日の臨海学校。そして今年は京都に修学旅行。……貴方にも言わなかったかしら？ううん、それだけじゃないわね、給食だったり、授業だったり、掃除だったり。……一つ一つが私にとっては新鮮だったの。……そして、いつもそこには信頼できる仲間がいた。とっても、幸せだったの。4年前の私だったら想像しても、仕切れなかったことが、体で、感じられてるのよ。実感できてるのよ？その楽しみを、あなたは奪うの？」

「……そんなの、『擬似』ですよ。絶対……。そう無理やり思わせてるだけだ」

「違うわ、そうじゃない。私は……」

「なあ、光彦。いい加減、わかってやれよ」

こんな修羅場という修羅場に割って入ったのは、寝ていたはずの、彼だった。新一先生だ。

いつの間にか、ソファの上で、背を向けて寝ていたはずの体はこちらにむけられ、じっと僕を見つめていた。そして、ゆっくり体を起こす。

「・・・あら、盗み聞き？」

少しトーンを落とし、灰原さんはいつものクールな表情で彼を軽く詰った。
く詰った。

「悪いな。仕事上結構耳がいいんでね。・・・それに、ヒソヒソ声
がいつの間にか結構バカでかい声にもなってたぞ？まあこんな絵空
話、劇の練習かくらいしか思えないだろうけど・・・聞かないフリ
して眠ろうにも眠れなかったよ」

「ごめんなさい」

僕がしょんぼりして答えると、彼は鼻でフツと笑った。

「別にいいけどさ。・・・これはオメーと灰原の話だから、黙って
ようとは思ったけど、埒があかないんで言っているのか？」

「は、い・・・」

僕は、こくり、とうなずく。それから、チラリ、灰原さんを見て。
灰原さんは無表情でそのふわふわの髪をかきあげていた。

「・・・こいつの気持ち、多分ホンモノだぞ？」

「え？」

「元に戻らないっていう意志のこと。現実に戻りたくねえ、とかそ
ういうんじゃないくて。純粹に今の生活を楽しんでること。見て
てわかるんだ、俺。・・・今のオメーには何言ってもわかんねーだ
ろうかもしれないけど。蘭だけに現^{うつ}抜かしてるって思われてるかも
しれねーけど、それだけじゃねえんだぜ？」

「・・・どうだか、ね」

「おい・・・」

灰原さんの突っ込みに、先生は軽く突っ込む。まったくもって、こんなシリアスな話をしている時にも2人は相変わらずで。呆れながらも、それがこの二人の自然体なんだろうかと頭のどこかで考えていた。けれど話を折られて、ちよつとだけムツとしている彼に笑みがこぼれそうになってあわてて抑えた。それに気づかないでいるようで、少しだけほっとする。

「あゝ何だ、その。とにかく、わかるんだよ。こいつが大体何考えてるか、今何悩んでるか。コナンだったときよりも、もつと。それは付き合ってきた年数が長くなったからかもしれないけど。・・・でも、今は本当に、この生活に楽しんでると思うんだ。」

・・・確かに、オメーが4年前、余裕がなくて気づけなかったことも、こうして今、沢山気づいてしまったこともあるかもしれない。だけど、今と4年前じゃ、確実に違うんだ。もう、時間は動いてる。止まったままじゃないんだよ。こいつは・・・。灰原は、あの時、決意したんだ。この姿で生きること。お前たちと一緒に、歩幅をそろえて進むことを。その気持ちを、信じてやれないのか？この4年間、灰原は自分を騙していたと思っっているのか？・・・違うだろう？信じてやれよ、自分の気持ちに。・・・大丈夫、間違っていないよ。灰原は灰原のまま。今も、昔も。俺がコナンでいるときだって、こいつは一番にオメーたちのことを、考えてたぜ？自分の思ったことは偽ってオメーらに真実を曲げて伝えることはなかったぜ？わかっている、だろ？」

「はい、でも・・・」

「自信を持てよ。・・・それに、オメーは、こいつに元に戻ってなんてほしくないんだろ？無理やり自分を納得させてるだけなんだろ？・・・苦し紛れだぜ、それ」

「・・・せ、先生っ！」

彼には何でも、お見通しだ。わかってほしくないこともすぐにばれる。

きつと、目の前の灰原さんだっけ？いぶん前からわかっていることなのかもしれないけど。

「素直になれよ。いいと思うぜ、それくらい。自分の気持ちを隠して通して後で後悔することが一番つらいってことぐらい、オメーにだってわかるだろ？またトラウマになっちゃってもしょうがないじゃないか。なあ、おい」

「なっ・・・！」

パンツと強く背中を叩かれるから、文句を言おうと思わず振り返れば、すでに彼はその場所にはいなく、部屋のドアに向かって歩き出していた。そうしてドアの前に立ち止まると手をひらひらさせて、小さく何かを言った。

読唇術なんてやったことがないので、その早口を咄嗟に読み取ることができなかったけれど、多分『がんばれよ』の一言なんだろうなあと頭の中で考えて、小さくうなずいた。

わかってる。

・・・わかってますよ、先生。

「じゃ、俺、先に家、戻るわ。蘭がまた心配すつといけねえから」

「あら、今日もまた夕飯作って待ってくれてるの？いい奥さんじゃない」

「うっせ。まだ結婚してねえっつーの」

少し頬を赤らめて、部屋を出て行くその背中に、僕は思わず笑っていた。自然に、笑みがこぼれていた。

ぱたり、ドアの閉まる音。

一気に湧き出る、緊張。

そして、無の沈黙。

僕はその瞬間、すう、と息を吸い込んだ。

「灰原さん、僕・・・ホントは先生の言うとおり、『あなた』を失いたく、ないんです。ホントは、姿、形が変わってほしくない。わかってるのに、あなたは志保さんになっても僕らを大切にしてくれるってことはわかってるのに。それでも、僕は『君』と歩幅をそろえて歩きたいんです。『あなた』ではなく、『君』として、対等に・・・だから・・・」

「・・・バカね」

彼女は、片眉をひそめ、困ったように笑った。

「だから言ってるじゃない。私は、最初から・・・でも」

気がつけば涙が滲んでいたのか、彼女のハンカチが僕の目の前に出され。

彼女は笑ってこう言った。

「ありがとう。・・・そして、これからも、よろしくね」

窓の外は粉雪がまだ降り注いでいた。
けれど、それはとてもやさしく。
僕の心を、撫でるそれは。

冷たく、あたたかい、やわらかな雪の粉。

18 (後書き)

リハビリ小説ですー。

ちゃんと話につなげているでしょうか・・・？

・・・1年以上の不定期更新、すみません。
雨と老女もがんばります。

こつぶでした。

エピローグ

また、雪だ。

3月。僕は新一先生の家であたたかいブラックコーヒーを飲みながら外を見ていた。

白く分厚い雲からちらちらと降ってくるのは真っ白い粉雪。今年は例年に比べて雪が多い。それも、水分の少ない粉雪が振っているなんて。

もう3月。明日は卒業式だというのに、だ。

「こりゃ明日は大変だ。・・・小林先生も振袖着るんだろ？」

「ええ。すぐく気合入ってましたよ、6時に美容室だとか」

「うわ、大変だな」

新一先生との会話は、今は『コナンくん』そのものだった。

もう僕らには偽りは必要なかった。

呼称は常に『新一先生』で通しているけれど、今の気持ちは、『先生』に対する気持ちよりも、転校して行ってしまった『コナンくん』に対する言葉に近かった。

体は『新一先生』だけど、あの日以来、目の前の彼は『コナンくん』ではないのだ。そうして彼もそういう風に接しられることを喜んでいた。

そう、あの日以来、僕は新一先生に対する距離は一切なくなっていた。コナンくんに対してのトラウマも、しこりも、全て。

僕らの1，2年の担任だった小林先生は、また6年C組の担任を受け持っている。そして彼女も僕たちの卒業を待って、出産、育児休暇をとるという。去年結婚したばかりだというのに。小林先生の

ウェディングドレスはとてもきれいだった。僕は、あのころ灰原さんや歩美ちゃんとの将来を重ねたものだ。

「気合入ってるといえば、B組の九十九さんも髪の毛をセットしに行くとか言っていましたけど」

「あー、すると思った。すっげえ派手なドレスとか着てこねーだろうな」

「まさか。・・・園子さんがそうだったんですか？」

「や、さすがにドレスは着てこなかったけど・・・。無駄に目立ってたな」

くっくとおかしそうに新一先生は笑った。その姿に僕も微笑む。

ホントに彼は不思議な人だ。僕は彼と確かに1年と半年をクラスメートとして過ごし、そして『彼』と別れてから今までの3年と半年を『知り合いのお姉さんの恋人』、ここ1年ではそれに加え、僕個人で『塾担当講師』として過ごしている。

だけど、彼は今では、クラスメートになったり先生になったりするわけで。こんな混合した会話を真顔で彼としているなんて、きつと事情を知らないほとんどの人は首をかしげるのだろう、と。

僕だって、このことを一番わかっている当人だって、頭がこんがらがってしまうのはないかと心配することなんて日常茶飯事だ。幸い今はまだそれがない。

「・・・よかった」

「え？」

僕は飽きることもなく、絶え間なく窓から雪が降る様子を見ていたが、新一先生が心底ほっとしたというような様子で言うので、思わず彼の方へ振り向いた。彼の意図がつかめなかったのだ。

「オメー、落ち込んでるように見えなかったからさ」

「ああ・・・」

その一言でようやく合点する。

僕は中学受験を試み、3校受験したのだが、全滅で。その報告をしにここにきたわけでもあるのだ。半分はそれ以外にただ、彼に会いたいがために来たということもあっただけ。

「オメーの今の頭じゃ1校以外はどっちも安全圏だったんだけどな・・・。オメーどんなケアレスミスしたんだよ。名前書くの忘れたとかそういうんじゃないだろうな」

「違いますよ、書きました」

「じゃあどんなミスをしたんだよ、・・・っ、おめー、まさか」

新一先生の目つきが険しくなる。その表情の意味を推測し、僕は軽く笑った。

「まさか。わざとミスなんてしませんよ、これが僕の実力だった、ただそれだけのことです」

「そか」

「そうですよ」

僕は鼻で笑った。・・・でも、と僕はふと思い、コーヒーを飲むうとする手を止める。

「どした？」

きょんとした先生の顔。

「・・・あ、いや。・・・でも」

「でも・・・？」

「・・・やっぱり離れたくないな、って思ったのは事実です。一人で進学して、みんなと別れたくないな、って。一人離れて電車に乗って違う街に行くのも嫌ですし。・・・それに」

「・・・”それに”？」

新一先生の怪訝そうな顔に、僕は一瞬だけそれを言うのに迷いが生じた。

顔が火照っていくのを感じる。でも言わなくちゃ。そう思って僕はその言葉を言った。

「同じ歩幅で歩こうって僕から誘ったのに……。せっかく『宮野志保さん』に戻ることをしないでいてくれたというのに、そんな彼女の成長を、一緒に見られないのはつらいと思ったんです」

「……ふうん。……そっか」

「そうなんです」

僕が強くうなずいているのに対し、先生の顔があまり冴えなかった。具合でも悪くなったかと心配し、思わず口を開きかけた時、彼はぽつりと言った。

「……俺たちは、オメーに対して、余計なことをしちまったのかもな」

「……え？」

「受験日に『コナン』に似た少年と出くわすことなんてそんな確率そこら辺にあることじゃねーんだし。お前のひとつの未来への可能性を俺らは」

「そんなことないですよ。……いいえ、そんなことを言わないでください」

僕は、さえぎった。

そうだ、そんなことは言わないでほしい。

「だって。……だってね、僕は感謝してるんです。先生が、灰原さんが僕のためにあの告白をしてくれたこと。……じゃなきゃ、僕は今だって辛い思いを抱えていた。こんなにスッキリと年を越して、そうして卒業できるとは思えなかった。きつと僕は受験したその日にも暗く辛い思いを抱えてる。……ちょうど僕の本命の日も、雪でした。僕はきつとコナンくんのことを思い出していて本領を発揮できなかったでしょう」

「そっか」

「……そうですよ」

そうなのだ。

あの日もし、雪が降らなければ、その日の塾の担当講師が新一先

生でなければ、僕が彼を思い出し、あの寒い中、傘も差さずに塾を飛び出すこともなかった。そうして情けなくも歩美ちゃんや元太くん、園子さんに蘭さんを巻き込むこともなかった。

けれど、あの日もし僕が新一先生を見て、『コナンくん』と重ねて強いトラウマに陥ることをしなければ、新一先生は僕と灰原さんを連れてあの遊園地で、僕らが初めて子どもだけで行った遊園地で、そして先生の強い縁ゆかりの地であんな告白を受けることはなかったのだ。

そうして、僕は強い衝撃を受け、

倒れることも、

『小学2年のあの日』に戻って僕の強いトラウマと向き合おうと奮闘することも、

そうして目覚めた後、全てを知った後でも灰原さんに『灰原さんとして傍にいてほしい』ということ告げること、

そんなことは全てないはずだったのだ。そうして僕は今でも見えないコナンくんの重圧に押し潰されているのだろう。

だから、僕はこれでよかったのだ。

「そう、これでよかったんです。・・・結局は中学を卒業し、高校に進学するとなればそのときに僕らは決して同じ道へ進むとは限らないわけですし。・・・願わくば一緒に大学までは進めていきたいのが本当のところですけどね」

「・・・あいつらだってそう願ってるはずだよ」

「そうですか？ならいいですけど」

「そうだよ。でも、灰原は別として、あいつらと同じレベルの高校だったら、オメーがすごくレベルを下げるか、あいつらに合宿でも

して猛特訓するか。2択だけだぞ？歩美はちよつとコツを教えたら一気によくなる気もするけど、元太は今の頭^{あいつ}じゃ手の施しようがねえ……」

「もうっ。そんな弱気なこと言わないでくださいよ、新一先生ともあろう人が。事件と勉強とじゃ違うんですか？僕の偏差値を短期間で14も上げてくれた先生じゃないですか。本命の学校だって最低のEランクをBランクまで押し上げた」

「なのに全滅だけだな」

「痛いなあ、それは今ここで言うことじゃないでしょ」

「あー、わりわり」

くっくと新一先生は笑う。僕は拗ねて口を尖らしていたが、思わず顔を歪ませ、笑った。た。

「で、今度の目標は？」

「え？」

「高校。あいつらと進みたい高校」

「それは勿論。……帝丹高校です！」

びしっと言いつ切る。

あまりにはっきり言うから、暫し新一先生は目を丸くしていたが、表情をすぐにやわらかくした。

「おめーらしいな」

「ええ。帝丹高校で、新一先生と蘭さんや園子さんがすばらしいハイスクールライフを送ったように灰原さんや歩美ちゃんたちと……」

「俺、一年半しか高校生活送ってねえけどな。半分はコナンだったし」

「だあかあらあ！！そこで話を折らないでくださいってば！」

思わず声を荒げると、先生はおかしそうに笑った。
まったくもう、と僕は深くため息をこぼす。

「でもまー、やっぱしあそこだと、元太だけじゃなくて歩美にもこの3年でがんばってもらわなきゃ・・・ハードル高いぞ？」

「・・・ああ、はい。でもそれ以前に3人は僕の気持ちに賛成してくれるかどうか」

「するんじゃない？あいつらのことだから・・・大体オメーが落ちたこと1番に報告してくれたのあいつらだから」

「えっ」

「・・・すっげー言葉が弾んでたから最初受かったんだと思ったけど・・・。・・・あいつらの気持ちがそっから伺えるだろ」

「ハハ」

わざと作った、その意味深な先生の瞳を見て、僕も思わず笑った。

「あいつらはもともとオメーと離れたくなかったんだよ。オメーが灰原が本当は宮野志保という人物で、俺みたいにな本来の姿に戻ることが一番じゃねーかって思って、無理に送り出そうとしていたのと同じ。・・・あいつらもまた、オメーが別の進路に進むことを応援し、心では泣いてた」

「そう、だったんですか・・・」

歩美ちゃんと元太くんの顔が浮かぶ。そんな態度一度も見せなかったのに。

「だから自信を持ってあいつらと・・・灰原を含めた4人で中学生を楽しむこと。それから、帝丹高校にみんなで行きたいんだったら、あいつらに意志を伝えること。そーしたらあいつらもまた目標

決めてがんばる気になるから。・・・それから、最後に」

「最後に？」

ごくり、僕は息を呑む。指折り数えていた新一先生の手が止まり、ちらり、僕を見下ろした。

「最後に光彦自身のこと。おまえの今の学力で行くなら帝丹は大丈夫だと思うけど。・・・油断せずに引き続き勉強続けること。・・・オメー、メンタル面、弱^{よえ}えんだから。なんか動揺することがあっても余裕で合格点取れるように」

「わかってますよ。・・・勿論、引き続き、担当講師よろしくお願いしますね。元太くんや歩美ちゃんにも入塾手続き早速取ってもらうようにしますから」

につこり当たり前のように言うと、新一先生は苦笑いして見せた。

「おいおい。その頃には俺だって大学卒業してるよ。事件やバイトで忙しくて1つ単位落としそうなんだ。冗談にならねーから、やめてくれよ、そんなこと言うのは」

「え、あ、そっか・・・そうですよね、・・・そうだった」

そうなのだ。きっとその頃には先生も蘭さんと結婚し、私立探偵事務所を築いてバリバリ働いているのだろう。あの場所にいるはずもないことなのだ。トラウマもなくなった僕たちの面倒を見る余裕なんて・・・

「担当講師はしねーけどさ。・・・勉強ぐらいは見てやるよ。いつでもこうやって家へ来いよ、待ってるから」

「え？だって、仕事は」

「バーロ、俺を誰だと思ってるんだよ。工藤新一だぞ？それと、

オメーの友達の江戸川コナンだろ？事件なんて朝飯前だよ。オメーらの勉強見る時間ぐらいあるだろ。合宿でも何でもしてやるよ」

しゅんとしかけた、僕の目に光が灯った。

「はいっ！」

僕は部屋に響き渡るくらいの大きな声で、そう言った。立ち上がった瞬間に、ガシャンとコーヒークップがこぼれそうになるくらいに。

うれしくてうれしくて、仕方なかった。それを見て、先生も笑う。僕の大好きな、憧れだったコナンくんと同じように。

「僕、将来決めました」

「え？」

「先生の助手になります！」

「・・・助手？」

「はい！高校生になったら、先生の傍で働いて、それでいつかは・・・」

「いつかは？」

「先生に認められるような探偵になるんです！先生と同じ舞台に立って、いつかは一緒に・・・。新一先生と服部さんや白馬さんみたいに、推理を楽しそうに会話するような、そんな関係になるんです」

あのころ。彼がコナンくんだったときは、どうしてもそんな関係になれなかった。

いつも上を見上げてた。

同じ場所にいても、殺人現場やお宝の暗号文に出くわしても、僕らは彼の助けなしでは前へ進むことはできなかったから。

だから。

「なれるさ、絶対」

「え？」

「オメーだったら、絶対なれる。・・・同じ舞台に立てること、
・待ってるぜ」

先生が手を差し出した。僕の心はさっと暖かくなった。

「はい！」

僕はそういうと、しっかりと先生の手を両手で掴んだ。

雪はまだ降っている。しんしんと、音もなく。

「明日は、積もるだろうな」

また、先生がコーヒーをすすって、さっきと同じようなことを言
った。

「泣くなよ」

「泣きませんよ」

僕は笑顔を作ってそう言った。

でも、泣くような気がして仕方なかった。
皆と離れるようなことがなくなったとしても。

「がんばれよ？」

ぽんと肩を叩かれ、顔を上げると、先生は微笑んでいた。
僕も、力強くうなずいた。

明日は、卒業式だ。

きっと明日もまた、雪が降っている。きっと僕らの足を滑らすこ
とをするのだろう。けれど、それでもよかった。

もう僕は雪を見てトラウマを抱えることはないのだから。逆に、粉雪を見て、僕はこれからの未来、新一先生とのこの一連のことを思い出すことになるのだろう。今日のこの日のことも、明日の卒業式のことも。そうして笑顔で語ることになるのだろう。素敵な思い出として。

僕は再びコーヒーを喉に慎重に流しながら、目の前のクッキーに手を伸ばす。それから、そうだ、と思い出した。

「ねえ、先生。・・・明日の答辞の最終練習、付き合ってくれますか？」

<おわり>

エピローグ（後書き）

皆さん、はじめまして、そしてお久しぶりです。こつぶです。

お待たせしました方は、ごめんなさい。

とうとう、長編『粉雪』連載終了になりました。最終回になりました。

思えばこの連載が始まったのはちょうど2年前。（正確に言えばあと1ヶ月ありますが・笑）寒いなーと、リハビリリハビリっていうような感じで、その時期ちょうど滞ってた（そして今も滞ってる）『雨と老女』の連載の気分転換にと書き始めたのですが。

・・・すみません、これも途中から滞り始め、ようやく前回より半年以上経ってできあがりました。とりあえず終ってよかったー！

新一先生、mittan、哀たん。

この三角関係を書くのがすごく楽しかったです。でも、今の彼の気持ちは恋愛とかじゃなくて。それ以外のことで悩んでましたが。きつとまだ歩美ちゃんと哀ちゃんの間で揺れ動いてるんでしょうね。

「哀ちゃんのまままでいてくれ」なんて言ってるけど（笑）。

どっちに転ぶか。私は、哀ちゃんは、コナンくんや新たんじゃなきゃ、相手はみったんだと信じてるから！いや、むしろ哀ちゃんとのカップリングで、コ哀が一番だとしたら、2番目はみつあいだと信じてるから！！（言っちゃった！）

そんなわけで、ここまでお読みいただきまして、ありがとうございます

いました。

これからよろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3704b/>

粉雪

2010年10月9日21時19分発行